送別歌行の形成と展開Ⅲ

乾　源　俊

還山吟……二二九
逸人之挙……二三二
高道挙徴……二三五
夢見一真容……二三四
玄元皇帝玉像……二四二
空中聞語……二四五
朝天赴玉京……二五四
西岳雲臺歌……二六四
落第還嵩山……二七二

天宝元年、李白は宮廷に召される。それは隠逸挙人（「高蹈幽隠」「逸人之挙」）に応じたものであったと思われるが、これを機にその歌行制作も山に還る友を送る送別の作として新たな展開を見せることになる。そもそも隠逸挙人は王朝の喧伝する聖世具現の道具であり、召し出された隠士を送る公式の宴で、詩歌の応酬をするのが習いとなっていた。そこでは再三の招聘に応じて謁見、しかし仕官の要請は固く辞し、隠逸の志を述べて放還、という隠逸の姿が描かれる。それは一種の頌歌であった。李白の場合は、書き手自身が当事者として、聖世具現を演出する役割をふられており、物語が内部から体験されるわけで、その結果が自己の分身たる友人の像に反映される。当初の絵に描いたような理想の人生は、それが実地に生きられるにしたがって現実との間に齟齬を生じ、苦い思いをともなうだろう。王朝の描くおおいなる物語への参画とそれからの離脱と。こうして李白の送別歌行は、離京後の長安体験の決算書ともいうべき留別の作へとさらなる変貌を遂げてゆく。都市を主題とした初唐型の七言歌行では、水辺へと向かう運動のなかで古人との心の交流が試みられ、見いだされた時間によって李白は慰撫されたのであった。ここでもやはり、自分は誰かという問いが問われるのであり、作品は現実の生にさきだってその意味を探索する場となるだろう。

還山吟　召し出された隠士がしばらくの宮仕えのあと辞表を奉り山に還ることを請う。そのおりに別れの宴が催され、皇帝以下百官が別れの歌を贈る。初唐以来、その顕著な例は司馬承禎をめぐるものである。彼が武后に招かれた際、洛橋東の宴で李嶠らが贈った七絶の作が伝わる。また睿宗に招かれた際には李適らによる応酬があ

ったという。そこには茅山の先師陶弘景が辞職にあたり征虜亭で盛大に餞送された故事と、陶弘景自身が遺した文学が色濃く反映されていよう。すなわち俗世との訣別を決意した隠逸の心境、これから向かう山岳の風景などを描くことによって餞するという。そうした書き方が武后期の宮廷詩人によってあらかじめ準備されていた。送別詩の書き方がその後どのように展開していったか。開元九年と十五年、玄宗による二度の徴招の際、司馬承禎は王朝の道教政策に深く関与したが、その際に玄宗御製の送別詩が遺る。玄宗には他にも道士に宛てた作例がある。君主の催した宴での例として、天宝三年、賀知章送別の宴における応酬は君臣百僚による多数の作例を伝えている。その他、さまざまな宴や個別のやりとりのなかで試みられたものとして、開元天宝の間、詩題に「送……還山」「送……帰山」などとする隠士送別の作がめだってあらわれてくる。「還山」とは致仕帰隠の含みをもつ。その語義に即して言えば、前者「送……還山」詩は隠士が朝廷より公的に招かれた際の作、後者「送……帰山」詩はそれに限らずひろく諸事情により帰隠する際の作、ということになる。そうした原則によりつつも実際の場における両者の使い分けは必ずしも厳密でない。また、李白には、帰隠する自身の心境を述べる還山の詩、すなわち「還山留別」の作もある。これらを対象に、開元天宝期における隠士送別の詩の制作状況を見てゆく。

「送……還山（帰山）」詩歌

玄宗　☆送賀知章帰四明　送趙法師還蜀因名山奠簡　送道士薛季昌還山　王屋山送道士司馬承禎還天台

送胡真師還西山　詩送玄静先生暫還広陵　詩送玄静先生帰広陵

李林甫　☆送賀監帰四明応制

王昌齢　送東林廉上人帰廬山　巴陵別劉処士

李頎　＊送王道士還山　送盧逸人　送暨道士還玉清観

盧象　☆**古歌辞送賀秘監帰会稽**

王維　**送友人帰山歌二首**　送王尊師帰蜀中拝掃　送張道士帰山　送方尊師帰嵩山　送張五帰山

＊送高道弟耽帰臨淮作

李白　**鳳笙篇**　送韓準裴政孔巣父還山　**白雲歌送劉十六帰山**＝**白雲歌送友人**　＊**西岳雲臺歌送丹丘子**

送裴十八図南帰嵩山二首　送于十八応四子挙落第還嵩　☆送賀監帰四明応制　☆送賀賓客帰越

訪道安陵遇蓋寰為余造真籙臨別留贈　奉餞高尊師如貴道士伝籙畢帰北海　送楊山人帰嵩山　＊送蔡山人

＊**鳴皐歌送岑徵君**　＊送岑徵君帰鳴皐山　**鳴皐歌奉餞従翁清帰五崖山居**　魯城北郭曲腰桑下送張子還嵩陽

送范山人帰太山　送通禅師還南陵隠静寺　送王屋山人魏万還王屋　送温処士帰黄山白鵝峯旧居

送楊山人帰天台　贈別王山人帰布山

高適　宋中遇林慮十七山人因而有別　送楊山人帰嵩陽　＊送蔡山人　**賦得還山吟送沈四山人**　贈別沈四逸人

儲光羲　貽劉高士別　送王上人還襄陽

杜甫　送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白

「還山・留別」詩歌

李白　還山留別金門知己（＝東武吟）　初出金門尋王侍御不遇詠壁上鸚鵡（一作勅放帰山留別陸侍御不遇詠鸚鵡）

夢遊天姥吟留別

ゴシック＝歌行作品　＊隠逸挙人に応じたと推定されるひとへの作

王維『王摩詰文集』　李白『李太白文集』　他『全唐詩』『全唐詩補編』より

☆賀知章送別詩はこの他『会稽掇英総集』に五律・五排全三十二首　盧象歌行一首　いま盧象作のみ拾う

逸人之挙　ところで隠士の招聘が当時の選挙制度にどのように位置づけられていたのか。制度的な根拠は「制挙」にある。これは毎年行われる「進士・明経」の常科とは別立ての、天子自らが詔をくだしてときどきに必要とされる人材を召集するものである。常科の尚書省に対し、制科は中書省の所管となる。制科の科目はしたがって多様であるが、要するところ「徳行・才能・文学」の士か、あるいは「高蹈幽隠」及び「不能自達」者、その他「軍謀将略」「翹関抜山」「絶芸奇伎」なるものにまで及ぶ（『新唐書』巻44選挙志上）。選抜の方法は、要件にかなった人材を「所在長官」や「検察使・採訪使」らが推薦することが多く、候補者の身分に「現任官・前資官・出身人・白身人」などの条件が付く。場合によっては推薦人の身分条項が加わることもある。要はさまざまに条件を設け、遺漏なきように、世の人材をすくいあげる。そのような思想に基づく制度である。目的のひとつが野に埋もれる才能の捜揚にあることは、推薦人を得られない「不能自達」者に自薦せよとの詔の文言や、官吏任用資格を持たない「白身人」を受験資格とする場合があることなどによくあらわれる。このことはもうひとつ

の目的、ないし制度の深い意図と表裏の関係にある。すなわち、下じもの民草にまで広く深く皇帝の恩沢を及ぼし朝廷の支配を強固ならしめる、という。この後者の意図が端的にあらわれたのが「高蹈幽隠」者と対象とした挙人、そもそも出仕の意志のない者をわざわざ召し出して官に就けようという、特異な制度である。これは『論語』堯曰篇の「逸民を挙ぐれば、天下の民　心を帰せん」を理念とする。「大赦・巡狩・奉禅・行幸」などの慶事に付随して行われることが多く、皇帝の即位や改元などもおおきな契機となる。李白はこれに応じたのであろう。天宝元年から次年にかけての「高道（不仕）」科である。玄宗治下の先天から天宝年間に行われたこの類の挙を、『登科記考』他、陳飛『唐代試策考述』、孟二冬『登科記考補正』により拾えば、以下のとおり。「搜揚・遺逸」等の語は制挙一般についてひろく用いられ、制科の名目から純正の隠逸挙人を見分けることは難しい。「不求聞達」「以礼徴送」などの文言がより確かな指標となる。

先天二年　六月「其諸州有抱器懐才、不求聞達者、命所在長官訪名奏聞」

開元五年　二月「有嘉遯幽棲、養高不仕者、州牧各以名薦」

十一年　十一月「其諸色人中、有懐才抱器、未経薦挙（『唐大詔令集』作不求聞達）者、委所在長官審訪、択其名録奏」

二十年　十月「命巡幸所至、有賢才未聞達者、挙之」

二十七年　正月「諸州刺史挙徳行尤異、不求聞達者、特乗伝赴京」

同　　二月「草沢間有殊才異行、文堪経国、為衆所推、如不求聞達者、所由長官、以礼徴送」

＊天宝元年　「高道」（陳飛『唐代試策考述』唐代制挙科目年表）
　　↓天宝二年「高道不仕」（孟二冬『登科記考補正』引「陳尚君『登科記考』正補」）
　三載　十二月「百姓間有孝勤過人、郷閭欽伏者、所由長官具以名薦。……其有高蹈不仕、遁跡邱園、遠近知聞、未経薦挙者、委所在長官以礼徴送」
　　↓天宝四載　五月「引見諸州高蹈不仕挙人」
　天宝十三載　二月「其士庶間衆推孝弟、累代義居、高尚確然、隠遁巌穴者、委採訪使、博訪聞薦」

応試者の立場からすると、任官には礼部試である「進士・明経」の常科に応じ官吏任用資格「出身」を取得、三年の銓限を守り吏部の「銓選」を経るというのが着実な途である。その過程で任官を急ぐなら制科に応じるという方途もある。ただしこの当時、常科と制科を順に踏んでキャリアアップをはかる仕方は後年ほど定式化したものでない。常科と比して天子自詔の制科は相応の重みをもっており、常科を軽んじて制科に応ずる風潮さえあったという（高適「留別鄭三韋九兼洛下諸公」詩「憶昨相逢論久要、顧君哂我軽常調」『全唐詩』巻213、岑参「冀州客舎酒酣貽王綺寄題南楼」詩「夫子傲常調、詔書下徴求」『全唐詩』巻198等）。杜甫と元結は常科のほかに制科にも応じたし、高適は常科に応じず制科「有道」科に及第、任官した。制科に応ずるメリットは高第すれば即任官が可能なことである（「文策高者特授以美官、其次与出身」『通典』巻15選挙三）。李白の場合は高適ともまた異なるが、この特殊な位置づけの応試を選択したのは、それが彼にとって最も現実的な任官への途であったからにほかならない。こうした方途を採ることはめずらしいことでない。むしろ夥しい数の候補者がうしろに控えている。還山の詩が

贈られる相手がそれであり、李白自身そのなかから制作者として浮上してくる。

高道挙徴　「高道（不仕）」科については少し説明を要する。天宝元年七月初にこの挙を実施する旨、下詔があり、天宝二年正月に含元殿の元会儀礼で挙人の謁見がなされた。ことは『登科記考』及びその材料である『唐大詔令集』『冊府元亀』『旧唐書』『新唐書』等に記載がなく、岑参や王維の詩その他により確認される。岑参は天宝元年七月三日に「高道」挙徴がある旨の布告を見、潼関西の宿舎でふたりの「山人」に詩を寄せて、いまにあなた方にもお召しがあるだろう、と言う（「宿関西客舎寄東山厳許二山人時天宝初七月初三日在内学見有高道挙徴」詩「蒼生今有望、飛詔下林丘」『全唐詩』巻200『岑参集校注』40頁）。王維は「高道」に応じた族弟、耽へ送別詩を贈り、次年正月含元殿での元会儀礼のもようを写す（「送高道弟耽帰臨淮作（坐上成）」「群公朝謁罷、冠剣下丹墀。……或問理人術、但致還山詞」『王摩詰文集』巻9、「剣」原作「釼」、今拠『王右丞文集』改）。李白も後年この試に応じた杜秀才と出会い、相手を「高道」と称する（「答杜秀才五松山見贈」詩「骯髒不能就珪組、至今空揚高道名」『李太白文集』巻17）。その他、天宝二年「高道不仕」試に応じ家令丞同正直集賢院を拝した樊端が院中に急死した（「天宝二年、樊端応高道不仕試、拝家令丞同正直集賢院、暴卒院中」『職官分紀』巻15引韋述『集賢注記』）など。

制科挙行の詔と制挙人処分の勅について、前者は岑参が見たと伝える以上の情報がなく、後者は『登科記考』以下、補遺にかかわる諸研究にいずれも言及がない。しかし『唐大詔令集』に載せる年代不詳、孫逖起草の「処分高蹈不仕挙人勅」が、天宝元年「高道（不仕）」科挙人、処分の勅そのものである可能性が高い。『登科記考』

が採録しないのは、他の詔勅がおおむね年代を記すのに、これには欠けているのが一因であろう。天宝元年「高道（不仕）」科の存在が明らかでない情況で、題名に「高蹈不仕」と誤記されることにより、どの年度のものか確定できないままここにいたる、ということかと思われる。孫逖が中書舎人として詔勅を掌ったのは開元二十四年から天宝三載にかけて八年間（「二十四年、拝逖中書舎人。……逖掌誥八年、制勅所出為時流歎服」『旧唐書』巻190中孫逖伝）。かりに天宝元年挙のものでないとすると、この間さらに別の「高蹈不仕」科があったことになるが、そのような記事は見あたらない。さしあたり天宝元年挙のものと考えてよい。いま四段に区分して本文を掲げる。

孫逖「処分高蹈不仕挙人勅」（『唐大詔令集』巻106貢挙）

勅。（一）古之賢君、貴重真隠者、将以励激浮躁、敦厚風俗。伝不云乎、挙逸人、天下帰心焉、蓋謂此者。朕緬稽古訓、思弘致理。以為道之為体、先崇於静退。政之所急、実仗於賢才。是用求諸巖藪、仮以軺伝、虚佇之懐、亦云久矣。（二）卿等各因旌賁、来赴闕庭、誠合尽収、以光是挙。然孔門荷篠、唯数七人、商山採芝、空伝四老。今之応辟、其数頗多。（三）朕頃緣幸湯、粗令探賾、或全誠抗跡、固辞避於呈試、或含光隠器、不耀顕於文詞。未測津涯、難於処置、語黙之際、用捨遂殊。（四）其弟子春等、並別有処分。自余人等、宜各賜物十段。用成難進之美、以全至高之節。宜皆坐食、食訖好去。仍依前給公乗還貫。其華陰郡李崗等十六人、雖所挙有名、或称疾不到、宜令本部取諸色官物。各賜二十段、以充薬物之資。

みことのりする。（一）古のすぐれた君主がまことの隠者を尊重したのは、世の落ち着かぬひとびとを励まし習俗をよくするためである。いわゆる「逸人を挙ぐれば天下は心を帰せん」とはこのことだ。わたしは古のおしえを考え

よい政治を世間にゆきわたらせたい。おもうに道のすがたはまず静かに退いていることをとうとび、まつりごとの急務はまことにすぐれた才能をたよりとする。そんなわけでこのようなひとを岩かげや藪のなかにもとめ、乗り継ぎの馬車ではやく知らせるようにさせたが、虚心のおもいはまたかねてひさしいことである。（二）あなたがたはそれぞれ使者の招聘によって宮城の殿庭へと赴かれ、まことに人材はすべておさめられるべくこの挙へと臨まれた。だが孔子が隠者として挙げるのはだた七人のみ、商山で薬草を採ったのは四人の老人を伝えるだけ。このたびの招きに応じたものはその数がたいへん多い。（三）わたしはちかごろ温泉に行幸したおりにおおまかに探らせたところ、あるものは真心をまっとうし行いを気高くし固く辞して試験にさし出されるのを避け、あるものはうちにひかりを含みながら器量をかくし才能がことばに輝かなかった。渡しも岸もわからず処置がむずかしいが、出処進退が決まる際には用いられると捨てられるとがかくて異なることとなる。（四）さて弟子春らはともに別に沙汰がある。そのほかのものはそれぞれ十段の下賜物をうけるのがよい。推挙が難しいという美徳をなし至高の貞節をまっとうするからである。みな座につき食事をし、食事がおわれば行くがよい。そこでさきにならい公用車でもとの住処に還るように。さて華陰郡の李崗ら十六人は推薦の名簿には名があったが、あるものは病を理由に来ておらず、本郡の部局に命じてもろもろの物品を取らせる。それぞれ二十段の賜物をあたえ、薬品のもとでにあてるように。

いくらかのことが読みとれる。（一）選抜の趣旨。この挙の意義はひとびとを励ますこと。道の体現と政治の急務のため、静かに隠遁している賢才を招く、という論理を展開する。（二）ねぎらいのことば。多くの参加者があった。隠者が朝に満ち、今が聖世であることを自賛する。（三）選抜の講評。試験を辞退する一部の反応。

試験は文章が課せられる。判断が難しいがそれでも合否の差は生じる、と配慮あることば。（四）及第者の発表。名を読みあげ、他は下賜を与え食事のあと放還。召し出したことについて恩賞との名目。公用車を遣わす厚遇。挙に応じないものにも下賜の恩賞がある。その他、（三）に、試験が「縁幸湯」温泉に行幸したおりになされた、とある。これがかりに天宝元年挙の勅としてよいとすると、玄宗は同年十月丁酉（二十六日）に驪山に行幸し十一月己巳（二十八日）に還宮した。勅文は二年正月の元会儀礼で読みあげられたと思われるが、「頃」このごろ、と言うのに時期はかなう。（三）と（四）に、「試験を辞退・推挙が難しい・実際に来ない」などと言及されるのは、そもそもその気がない者をわざわざ呼びつけ試験にかけるという、この選抜の根本的な矛盾ないし特徴的な意味あいがあらわれるようで興味深い。礼をもって迎え公用車で送るなど、扱いが鄭重であることも含め、実際の役に立つ人材としてではなく、より聖世具現の象徴としての役割がおおきい。

天宝元年「高道（不仕）」科の詔勅にかんしては以上が知ることのできるすべてだが、名称の類似した天宝三、四載の「高蹈不仕」科については、召集と処分にかかわる両方の詔勅が『登科記考』に採録され、「高道（不仕）」科の実態を知るうえで参考になる。天宝三載「高蹈不仕」科を挙行する際の下詔は、同年十二月に玄宗が九宮貴神を祭る行事を行い、大赦を宣布した。その詔のなかにあわせて言う。家ごとに『孝経』を蔵せしめ、「孝勤過人・郷閭欽伏」者を薦めよ。「高蹈不仕・遁跡邱園」者で、まだ薦挙を経ていないものを徴送せよ。

孫逖「親祭九宮壇大赦天下制」（『唐大詔令集』巻74九宮貴神、『登科記考』巻9、『全唐文』巻310）

……自古聖人、皆以孝理、五常之本、百行莫先。移於国而為忠、事於長而為順、永言孝道、実在弘人。自今以後、

令天下家蔵孝経一本、精勤誦習。郷学之中、倍増教授、郡県官長、明申勧課。百姓間有孝勤過人、郷閭欽伏者、所由長官具以名薦。……朕惟熙庶績、博訪逸人、豈唯振抜滞淹、以期於大用、亦欲褒崇高尚、将敦於薄俗。虚佇之懐、兼在於此。其有高蹈不仕、遁跡邱園、遠近知聞、未経薦挙者、委所在長官以礼徴送。……

この詔も孫逖の筆にかかり、天宝元年挙のものと推定される先の処分の勅と文言がちょうど対応する。選抜の趣旨について、「わたしはさまざまな功績をよろこび、ひろく逸人をさがしもとめるが、それは下層にくすぶる者を奮い起こし、おおいに活躍することを期待してのことであるだけでなく、その気高さをほめたたえることによって、ひとびとの習俗を厚くするためである」と。先の処分の勅「将以励激浮躁、敦厚風俗」の含みがここにはより詳しく述べひろげられる。この天宝三載の制科は、天下に『孝経』を家蔵し誦習せしめたのにともない「孝悌」者の推挙がなされ、「隠逸」者が付随したものである。これにつき思われるのは、『孝経』がすでに開元十年に御注を、『道徳経』が開元二十三年に御注御疏を、それぞれほどこして天下に頒示されており、前年五月には再治注釈をほどこした『孝経』を重ねて頒示せよとの詔があったことだ。この後、天宝十四載には『道徳経』も再度頒示されることになる。

『孝経』『道徳経』頒示（『登科記考』他）

開元十年　六月「上訓注『孝経』頒於天下」

二十年　十二月勅「昔在玄聖、強著玄言……随所意得、遂為箋注……今茲絶筆、是詢於衆」

二十三年　三月「親注『老子』幷修「疏義」八巻……頒示」（『冊府元亀』巻53帝王部尚黄老一）

天宝二年　五月「重注『孝経』頒天下」

＊三載　十二月「令天下家蔵『孝経』一本、精勤誦習」

十四載　十月「頒御注『老子』幷「義疏」於天下」

この天宝三載の例では、挙人はそれぞれ「孝」と「道」の価値を割りふられて薦挙制度のなかに位置づけられているかにみえる。天宝十三載二月の制挙の詔にも「博通墳典・洞暁玄経」「清白著聞・詞藻宏麗」「軍謀出衆・武芸絶倫」者の自挙とは別に、「衆推孝弟・累代義居」「高尚確然・隠遁巌穴」者が並列されて聞薦の対象となっている。開元二十七年正月「徳行尤異」者と二月「（草沢間有）殊才異行・文堪経国」者は「徳行」と「文学」の士であり、これらとは異なるが、両者が並列の関係にみえる点では類似する。天宝元年の制挙には、正月下詔の「儒学博通・文詞秀逸」「軍謀越衆・武芸絶倫」者の薦挙があったが、『登科記考』はこれとは別に「賢良方正」科を拾っている。七月下詔の挙は、あるいは「賢良方正」と「高道（不仕）」の両科が対にしてなされたものであったかもしれない。

これに対応する処分の勅については以下のとおり。天宝四載五月に諸州「高蹈不仕」の挙人に対し帝が引見、沙汰があった。

「処分制挙人勅」（『唐大詔令集』巻106制挙、「天宝四年五月引諸州高蹈不仕挙人見詔曰……」『冊府元亀』巻98帝王

部徴聘、『登科記考』巻9、『全唐文』巻32）

勅。（一）君子之道、所以正心志、全貞吉也。逸人之挙、所以励天下、激浮躁也。朕欽崇先訓、以道化人、思致棲真之士、用光咸在之列。是以頻降旌帛、冀空巖藪、虚懐式佇、明発不忘。（二）卿等来膺辟命、遠至城闕。周文多士、既叶於旁求、虞舜疇咨、亦在於僉議。（三）爰命臺省、詢於道業。或善行無跡、名実難窺、或大器晩成、春秋尚少。津涯未測、輪桷何施。事且隔於行蔵、道遂分於出処。（四）其馬尚曾・常広心・賀蘭廸等三人、宜待後処分。崔従一・王元瞻・韓宣・胡賁・趙元奬等五人、年鬢既高、稍宜優異、各賜緑衣一幅、物二十段。余幷賜物十段。不奪隠淪之志、以成高尚之美。並宜坐食、食訖好去、依前給公乗還郷。（「数日、曾為左拾遺、広心・廸並為金吾衛兵曹」『冊府元亀』）。

先の天宝元年「高道（不仕）」科のものと推定した処分の勅と比べると、構成と内容、及び語彙にいたるまで酷似する。

（一）二年「将以励激浮躁、敦厚風俗」
　　四載「所以励天下、激浮躁也」
（二）二年「卿等各因旌賁、来赴闕庭、誠合尽収、以光是挙。……今之応辟、其数頗多」
　　四載「卿等来膺辟命、遠至城闕。周文多士、既叶於旁求、虞舜疇咨、亦在於僉議」
（三）二年「朕頃縁幸湯、粗令探賾。……或含光隠器、不耀顕於文詞」

四載「爰命臺省、詢於道業。或善行無跡、名実難窺」

二年「未測津涯、難於処置、語黙之際、用捨遂殊」

四載「津涯未測、輪桷何施。事且隔於行蔵、道遂分於出処」

（四）二年「其弟子春等、並別有処分。自余人等、宜各賜物十段。用成難進之美、以全至高之節。宜皆坐食、食訖好去。仍依前給公乗還貫」

四載「其馬尚曾……等三人、宜待後処分。崔従一……等五人、……各賜緑衣一幅、物二十段。余幷賜物十段。不奪隠淪之志、以成高尚之美。並宜坐食、食訖好去。依前給公乗還郷」

隠逸の挙人は、玄宗朝において、この時期特有の意味づけ、ないしは表徴を負うていたことだろう。ふたつの処分の勅に言う「道」、及び求める人物像は『道徳経』の言うところにちかい。たとえば道のすがたを「静退」にもとめるところ（「道之為体、先崇於静退」二年）、あるいは薦挙された逸人を、一見して判断しがたい、隠れて微妙な部分において評価するところ（「含光隠器、不耀顥於文詞」二年、「善行無跡、名実難窺」四載）など。『道徳経』には言う。道の体験について、おぼろげななかに何かがかたちをなし、精妙な何かがたしかにはたらいている（「道之為物、唯恍唯惚。惚兮恍、其中有象。恍兮惚、其中有物。杳兮冥、其中有精、其精甚真、其中有信」『唐玄宗御註道徳真経』第二十一章）。視ようとしても見えず、聴こうとしても聞こえず、取ろうとしても捉えられない（「視之不見、名曰夷。聴之不聞、名曰希。搏之不得、名曰微」第十四章）。心を虚しくし静けさをまもれば、静寂に入り性命にたちもどる（「致虚極、守静篤。……帰根曰静、是謂復命」第十六章）などと。また道を得たひとについて、

微妙なはたらきで奥深いところに通じ、深さははかりしれず、そのさまはしずかで、ぐずぐずして、いかめしく、さらりとして、純朴であり、からりとして、混濁している（「古之善為士者、微妙玄通、深不可識。……予若冬涉川、猶若畏四鄰、儼若客、渙若冰将釈、敦兮其若樸、曠兮其若谷、渾兮其若濁」第十五章）などとも。この挙人の取士基準がこうしたところにある。すなわち「孝勤過人・郷閭欽伏」者が『孝経』の徳を体現するように、「高道（不仕）」「高蹈不仕」挙人は『道徳経』の道を体現する者として推挙されたと考えてよいだろう。天宝四載の処分の勅には、臺省に命じ「道業」を詢わしめた（「爰命臺省、詢於道業」）とあり、この予想を裏づける。

「高道（不仕）」挙の前年には「明四子」科の実施が下詔されていた。諸州に玄元皇帝廟とともに崇玄学を置き、生徒に老荘文列四子を学習させ、修業後に挙送せよというもので、すなわち「道挙」のことである。開元二十九年正月十五日の「命両京諸路各置玄元皇帝廟詔」（『全唐文』巻31、『冊府元亀』巻53、『登科記考』巻8）に言う。

……両京及諸州各置玄元皇帝廟一所、毎年依道法斎醮。兼置崇玄学、於当州県学士数内、均融量置。令習道徳経及荘子文子列子。待習業成後、毎年随貢挙人例送至省、準明経考試、通者準及第人処分。……

開元末天宝初、道教政策は選挙制度にも反映された。「明四子」挙が常科「明経」に準じ学術的要素を問うのに対し、「高道（不仕）」「高蹈不仕」両挙人は「道」の体現を地でゆくひとを天子自詔の制科によってひろく求め、その体現の度合を問うという、前者を制度的に補完する意味あいがあったであろう。隠逸挙人は明四子科によって役割が明確になった。

夢見一真容　天宝元年と三、四載の隠逸挙人は、開元末から天宝初の時期における宗教政策をめぐる一連のうごきのなかにあり、その中心には玄宗の信仰の問題がある。玄宗の老子信仰については、吉川忠夫「唐の玄宗と道教」（『中国古代人の夢と死』第五章「道教の旅」215―221頁）が優れた概説をなしている。

……唐の玄宗はまったく道教にいれあげた天子といってよいのだが、そもそも、かれの道教信仰は、聖王の教師であるのみならず、同姓の故をもって唐王室李氏の始祖にまつりあげられた老子にたいする尊崇の念にはじまり、やがてその尊崇の念が、老子を中心とする道教の熱い信仰へとたかまったもののようである。即位してまもない開元三年（七一五）、老子生誕日の二月十五日を王朝の祝祭日の玄元節とさだめ、また老子をことほぐ「玄元皇帝賛」を書いているのは、老子にたいする玄宗の尊崇の念を示すであろう。玄元皇帝とは老子のことであり、およそ半世紀前の高宗の乾封元年（六六六）、老子にたいしてすでに玄元皇帝なる尊号が贈られていたのである。……

玄宗の老子にたいする尊崇の念は、『老子道徳経』の注を書き、その注をさらに敷衍する疏を書くことによってゆるぎないものとなった。御注ならびに御疏とよばれるものであって、御注『道徳経』は開元二十年（七三二）に完成し、二十三年（七三五）には御疏とあわせて天下に頒示された。これら御注と御疏が真に玄宗みずからの手によって執筆されたかどうかは疑わしく、真の撰者たる光栄は、宮中において『道徳経』の進講にあたった集賢院の学士たちにこそ帰すべきであろう。しかしながら、その撰者としてあくまで玄宗の名が冠せられ、それが王朝によって天下に頒示されたことのもつ意味は重大である。御疏の巻首にそえられた「道徳真経疏釈題」には、「粛粛たる皇祖、氏を我が唐に命（な）づく」と、唐王室の李なる姓氏が皇祖老子にもとづくことを述べるとともに、さらに唐王朝がその「垂裕

の訓（おしえ）、無疆の祉（さいわい）」の恩沢にあずかっていることが感謝されている。かくして、『道徳経』の御注と御疏の完成が老子にたいする玄宗の尊崇の念をいっそう深めるきっかけとなったことはたしかであり、老子ならびに『道徳経』の地位は以前にもましていちだんとたかめられた。すなわち、御注と御疏が天下に頒示された開元二十三年（七三五）には、『史記』の列伝の順序をあらため、伯夷列伝にかわって老子列伝を荘子列伝とともに首位におくことが勅命された。二十九年（七四一）には、西京長安と東都洛陽の両京、ならびに諸州にも玄元皇帝廟が設けられた。そしてなにより興味深く思われるのは、玄宗の夢のなかに太上老君ないしは玄元皇帝、またときにはその使者があらわれて、なにがしかのお告げを授けるという記録がめだってふえはじめる事実である。いずれの宗教においても、夢の啓示はその神学の重要な一環をなすと考えられるが、この事実は、聖王の教師にしてかつ唐王室の始祖たる老子にたいする尊崇にくわえて、神としての老子像が玄宗の心のなかでしだいにおおきくふくらみはじめていたことをものがたっているのではあるまいか。

開元二十七年（七三九）の十一月、予定されていた渭水北方への行幸を玄元皇帝の夢のお告げによってとりやめたところ、はたしてその日、すさまじい烈風が荒れくるったという。そして開元二十九年（七四一）四月謀日、まだ夜もあけぬ四更どきのことである。毎日かかしたことのない老子の尊像の前でのお勤めをおえた玄宗は、端座して心を静めていたところ、いつしかうとうとと眠りに誘いこまれた。そのとき、一人の老人が夢にあらわれてかたりかけた。「わしは汝の遠（とお）つ祖（おや）ぞ。わしの三尺余りの形像が都の西南百里余りのところにかくされている。世間のものはそれがどれほどの年代をへたものかだれも知らぬ。汝は人をやって探させるがよい。わしはきっとあらわれるであろう。そのうえで汝と興慶殿で相見しよう。汝がおおいなる慶（さいわい）をうけること、まちがいない」。宮中からさしむけられた使

者が玄宗の夢にあらわれたのと寸分ことなることなき老君の玉像をさがしあてたのは、ほかならぬ楼観の東南の山あいであり、そこには紫雲が垂れこめ、白光が天につらなっていたという。興慶宮の大同殿に迎えられた玉像は、さっそく臣下たちの拝謁がゆるされた。……興慶宮大同殿に安置された老君玉像の絵すがたは、天下諸州の形勝の地をえらんで「開元観」の額があたえられていた諸道観にも配られ、そしてとくに楼観には、このたびの奇瑞を記念して「玄元霊応頌」の碑が立てられた。……

さてところで、楼観の地から老君玉像が発見されたという事件の背景には、楼観、すなわち宗聖観の道士たち、「玄元霊応頌」に当時の宗聖観の責任者として名が見える観主の李元崱、監斎の顔無待、上座の傅承説たちの計略が考えられねばなるまい。玄宗の夢にあらわれたところの老君とそっくりの玉像が楼観の地から出現し、そのことが天下に宣伝されるならば、聖地としての楼観の地位は不動のものとなるであろう。当時、道教の聖地は、なにも楼観にかぎったことではなかったのである。五岳のそれぞれがそうであったし、後漢代に「老子銘」が立碑された陳国苦（こ）県、唐代では亳州に属する老君廟、あるいはまた江南の茅山もそうであった。それらはそれぞれ王朝と関係をとり結んでみずからの権威をたかめようとしていたふしがうかがわれる。しかも、開元が天宝と改元されたその年には、つぎのようなことがあった。天宝元年（七四二）正月八日、陳王府参軍の田文秀がつぎのように上言したのである。「玄元皇帝が大明宮正門の丹鳳門大街に降臨され、天下は太平、聖寿は無疆、と天子さまに伝えるようにいいつけられました。そのうえ、金の匱（ひつ）におさめた霊符が尹喜の故宅に蔵してあるむね告げられました」。宮廷からつかわされた使者は、楼観ではない陝州桃林県の南方、函谷故関の尹喜台とよばれるところから、その霊符を見つけだした。それには「天宝万載」の文字がみとめられた。改元されたばかりの年号との奇しき符合に玄宗が驚喜したこと、いうまでもない。

桃林県はさっそく霊宝県と改名された。また天宝三年以後、年をかぞえるのに「載」の字が用いられ、天宝某年、とよばずに天宝某載、とよぶようになるのも、「天宝万載」なる霊符にちなんでのことである。この茶番劇の実際の仕掛人がだれであったかはわからないが、楼観の道士としては坐視できないところであったろう。尹喜の故宅という由緒ある地位を、あたらしい時代の開幕にあたって点数をかせいだ霊宝県の方にさらわれかねないからである。

このように考えてくるとき、天宝八載（七四九）のこと、太白山人の李渾（りこん）なるものが太白山の金星洞で出会った一仙人から天子の長生久視——永遠の生——の符である玉版石記の存在をおしえられたとの報告にもとづいて、御史中丞の王鉷（おうこう）が首尾よくそれを探しあてるのだが、この宝探しの背後には、まきかえしをはかる宗聟観の道士が関係しているように感ぜられてならない。終南山と太白山はひとつらなりの山塊である。そしてかの岐平定は、七十三歳のとき、弟子たちをひきつれて太白山の絶頂におもむき、そこで仙去したと伝えられる。玉版石記は、科斗、おたまじゃくしのようなかたちをした古代文字で書かれていたため、だれ一人として読解できるものはいなかったが、玄宗はうやうやしく「玄記を捧げて宸極（だいり）に納めた」（于劭「玉版玄記頌」序）という。翌天宝九載（七五〇）にも、おなじく太白山人の王玄翼が宝山洞中で玄元皇帝に出会ったむねの報告が王鉷からあり、またまた玉石函におさめられた上清護国経、宝券、紀籙の類が得られるということがあった。……

玄宗の老子信仰は、本人による『道徳経』の注と疏の制作を機縁とし、先祖への尊崇の念から神としての老子の崇拝へとたかまったものであるという。そもそもこれより先、玄宗は「孝」が徳の根本であり教化と治国の要であるとして『孝経』に自注をほどこし天下に頒示したのであったが、その孝を尽くすべきおのれの先祖が、王

朝創業よりこのかた、歴代皇帝によってそれと認められ崇められた李耳そのひとであった。「道」の解釈をはじめとするさまざまな概念の相違にかかわらず、こうして道家の書が儒家経典のうえに接がれることとなった。その『道徳経』注疏において、しかし「道」は万物生成の原理として、「聖人」とはそれを自身のうちに体現するひととして考えられているという（中嶋隆蔵「唐玄宗皇帝の老子崇拝と『道徳経』理解」『六朝思想の研究』683―722頁）。こうした考察をなす当人によって、超越者としての老子が思い描かれ、しかも具体的な映像として外在化されるというのは、確かに不思議なことではある。御注御疏の撰者が玄宗本人ではなく集賢院の学士であろうことを含んだとしても。ともあれ還暦をひかえ、人生の晩年へと踏みだしてゆく玄宗にとり、老子の存在が次第におおきなものとなってゆくのは、周囲の臣下や道士たちの思惑とはかかわりなく、心的事象としては事実である。老子の夢見と顕現をめぐる経緯を、資料を交えてやや詳しく記せば、以下のようなことである。

開元二十九年正月十五日、両京及び諸州に玄元皇帝廟を置き、道教の法により祭祀せよ、崇玄学を置いて生徒に老荘文列の四子を学ばせ、明経科に準じて挙送せよとの詔が下される。かねてより家ごとに『道徳経』を習わせ教化につとめたが、まだじゅうぶんな理解に達していない下じもを導くためである、と言う（「命両京諸路各置玄元皇帝廟詔」）。前年五月には、東都積善里東南隅の旧宅に玄元皇帝廟と崇玄学を置きたいとの御意が宰臣に伝えられていた（「二十八年五月、帝謂宰臣曰、朕在藩邸、有宅在積善里東南隅、宜於此地置玄元皇帝廟及崇玄学」『冊府元亀』巻53、『登科記考』巻8）。

閏四月の某日、夢に玄元皇帝があらわれる。玄宗のことばは、牛仙客「皇帝夢玄元皇帝真容見請宣示中外奏」（『全唐文』巻300、『冊府元亀』巻53）によれば、以下のとおり。

……朕自臨御已来、向卅年、未曾不四更初即起、具衣服、礼尊容、蓋所為蒼生祈福也。昨十数日前、因礼謁事畢之後、曙色猶未分、端坐静慮、有若仮寐、忽夢見一真容云「吾是汝遠祖、吾之形像、可三尺余、今在京城西南一百余里。時人都不知年代之数、汝但遣人尋求、吾自応見、汝当慶流万葉、享祚無窮。吾自度其時、今合与汝於興慶中相見、汝亦当有大慶、吾猶未即言」。語畢。覚後昭然、若有所睹。朕因即命使、兼令諸道士相随、於京城西南求訪、果於盩厔楼観東南山阜、迺遇真容。一昨迎到、便於興慶宮大同殿安置、瞻睹与夢中無異者。……

吉川氏の訳は、老子のことばの部分までほぼこれに沿っている。注意したいのは、玄宗が朝のお勤めに端座静慮、ふと眠りにさそいこまれた、そのとき夢に「みすがた」があらわれた、と言っていることだ。ゆめともうつつともつかぬ夢幻状態のなかで見られたすがたは、鮮烈な印象となって玄宗をとらえた。はっと気がついたあと、ありありと眼に見るようであった「覚後昭然、若有所睹」。はたして探しあてられ、仰ぎ見られたそのすがたは、夢の記憶と一致した「瞻睹与夢中無異」。夢に見たものが現実によって確かめられた。熱い口吻が伝わるようである。その老子のありさまはどのように言われているか。「尊容」とあるのはお勤めに向き合っていた、もともと備わった像のこと。夢にあらわれ、再会を果たした老子には、ともに「真容」ということばが用いられている。神としての老子の「みすがた」というような意味だろう。その老子が自分の分身を指して言うことばには「形像」が用いられている。他の資料には『旧唐書』（巻24）礼儀志四に「天尊之像」などと言う。その材質が玉であったことは玄宗の「答宰臣賀玄元皇帝玉像手詔」（『全唐文』巻31）から確かではあろうが、臣下のことばにおおむね一貫して「真容」の語が用いられるのは、それがあくまで玄宗の夢にあらわれた老子そのものであるとい

う聖性を重んじてのことだ。瞻礼を許された牛仙客のことばには「自然相好、諒絶名言」と。あるがまま、道のあらわれそのものであるおすがたは、とてもことばにあらわすことなどできない、と述べられている。

このすがたはさっそく画像に写しとられ、あまねく諸州の開元観に送りとどけられることとなった。五月一日の玄宗「令写玄元皇帝真容分送諸道幷推恩詔」（『全唐文』巻31、『冊府元亀』巻53、『登科記考』巻8）には、やはりこの夢見の一部始終が述べられる。

……蓋為天下蒼生、以祈多福。不謂微誠上達、睿祖垂鑒、頃因仮寐、或夢真容。既覚之後、昭焉以観、瞻奉踰時、殊相自然、与夢相協。誠謂密降仙府、永鎮人寰、告我以無疆之休、徳音在聴、表我以非常之慶、霊貺有期。乃昊穹幽賛、宗社儲休、豈朕虚薄、能致茲事。若使寢之、乃乖祗敬。……

……そもそも天下のひとびとのために福多きことを祈っていたところ、思わぬことにわたしの真心が天にとどき先祖がおしえを垂れたもうたのであろう、ちかごろふと眠りこんだおりみすがたを夢にみた。目覚めてのちもまのあたりに見るようで、仰ぎ見れば時をこえて、すぐれたおすがたはあるがまま夢とかわらない。至誠に思うことはひそかに神仙の府よりくだり永遠に人間界をおさめ、わたしに極まりないさいわいを告げてめぐみの声はなお耳にあり、わたしに常ならぬことほぎを表してすぐれた賜物はきっとくだされる。かくて天はほのかにたたえ宗廟社稷はさいわいをたくわえる、どうして朕のうすい才能がこのことを招きよせることができたのか。もしこれをやめればうやうやしさに悖ることになる。……

叙述はこのあと、威儀法事をもって「真容」を迎え七日にわたり夜にお勤めせよ、また州の長官は四子挙人の推挙をせよ、及び恩赦と賜銭を行う、と続く。

画像が配布されて三月後の八月九日には、陵州開元観に「老君真容」があらわれた。おすがたは非常にはっきりとして、道士十数人がみな見た、しばらくしてお隠れになった、との奏上がなされる（「八月丁亥、陵州奏、開元観、老君真容見。儀象分明、道士十数人皆見、久之方隠。請頒示天下」『冊府元亀』巻53）。

年が明けて天宝元年正月八日、玄元皇帝降見の奏上がなされる。それをなした者の名は田同秀（『旧唐書』巻9玄宗紀、巻24礼儀志四、『資治通鑑』等。『冊府元亀』巻54作「田文秀」）。時は前日七日、場所は丹鳳門前の大通り（「玄元皇帝降見于丹鳳門之通衢」『旧唐書』玄宗紀）、あるいは永昌街空中（『旧唐書』礼儀志四）であるという。「永昌街」とは大明宮丹鳳門を出て大路を一区画先まで行ったところ、西側に「永昌坊」がある。正対する、東側に入ったところが「太寧坊」、その西南隅に玄元皇帝廟がある（徐松『唐両京城坊考』巻3西京外郭城大寧坊「西南隅太清宮」）。あらわれた玄元皇帝は「天下太平、聖寿無疆」のことばを玄宗に伝えるよう言いつけ、霊符の存在を告げた。霊符は発見され、十七日、含元殿に献納された（『旧唐書』礼儀志四）。これにより二十六日、詔して二月十五日に玄元皇帝廟で祭祀することが宣示された（玄宗「天宝改元制」『全唐文』巻24、『冊府元亀』巻54）。

その後も類似の奏上をなす崔以清なる者があり、彼が見たという場所は天津橋上、すなわち東京の皇城と玄元廟がある積善里の間に架かる橋上であった。『冊府元亀』には九載正月元日平明のこととするが、『資治通鑑』には田同秀の記事に続けて一年後のこととし、問い質したところ虚言であることを白状したとする。ともあれ玄元皇帝は時と場所を選んですがたをあらわされる。

玄元皇帝玉像　先に両京と諸州に置くよう下詔があった玄元皇帝廟は、天宝元年二月九日に長安太寧坊と洛陽積善坊に落成した（『冊府元亀』巻54帝王部尚黄老二）。廟殿の規模は四柱十二間、前後東西に階をそなえた。宮門は正面が瓊華門、東西がそれぞれ九霊門、三清門という（徐松『唐両京城坊考』西京外郭城大寧坊「西南隅太清宮」注）。名称は、同年九月に太上玄元廟、翌年三月にはそれぞれ太清宮、太微宮、諸州は紫極宮と重ねて改称された。廟宇の完成にあわせて、工人に命じ、太白山から白石を採り玄元「聖容」をつくり、また白石を採り玄宗「聖容」をつくって玄元の右に侍立させた。それらには彩色の絹織と珠玉による王者衮冕の服が着せられていたという（『旧唐書』礼儀志四、『唐会要』巻50尊崇道教、『冊府元亀』）。十五日、玄宗による祭祀が催された。王維には玄宗がこの像を慶賀して詠んだ詩に唱和した「奉和聖製慶玄元皇帝玉像之作応制」（『王摩詰文集』巻4）があり、「玉京　大像を移し、金籙　群仙会す」と、玉像が運びこまれ祭祀が催されるさまを描くのは、このときのことであろう。王維は同年春、朝廷に入ったとされる（陳鉄民「王維年譜」『王維集校注』1349頁）。王維はまた後にこの像を慶賀した「賀玄元皇帝見真容表」（『王摩詰文集』巻3）を奉り、老子及び玄宗の像の輝かんばかりのありさまを日月星辰にたとえ、宮殿を照らして夜も昼のように明るい（「真容聖容、既明四目、照殿照室、忽類三光。蕊宮自明、初謂上天無夜、桂殿如昼、還疑就日而朝。琪樹韜華、瑤池奪映」）とも述べている（「王維年譜」繫天宝八載『王維集校注』1356頁）。

この玄元皇帝廟における設像に玄宗の夢がどうかかわるのか。玄宗「為玄元皇帝設像詔」（『全唐文』巻31）は計画の当初に書かれたものだろう。内容は像を設立する趣旨を述べ、『道徳経』の頒示に触れたあと、『易』繫辞下伝及び『道徳経』第二十一章の文言を引いて、像というのは天地の道をかたどったもの、道はほのぐらいとこ

ろから精がたちあらわれる、それはことばではなくかたちに求められる（「易曰、象也者像此者也。経曰、窈冥中有精。則窈冥之精、可以尋象求、不可以名言得也」）、これにより士庶を導くのだ、とする。偶像による教化の効を説くのは、玄宗のなかでふくらみつつある老子の像と関係しよう。しかしここに夢の体験についての言及はない。設像は廟宇の建設とともに当初より計画されていたところに、たまたま夢が重なり合ってきたものであろうか。いずれにせよ、夢におとずれ、現実にすがたを顕した「真容」は、この白石像の造型にも影響したことは想像にかたくない。それはかたちばかりのことではない、像に「聖性」という、もっとも重要な属性を与えた。老子の夢見は、王朝の宗教政策に息を吹きこむ、もっとも重大な契機となったであろう。

ところで玄元皇帝廟の玉像の採石地は太白山である。このことが廟堂建設の当初より計画に含まれていたか、玄宗の夢見が関係したか、これらのことはわからない。いずれにしても、太白山から終南山へ秦嶺山脈を東西につなぐラインは、朝廷にはより強固なコネクションをもっていたと言える。なお、杜光庭『録異記』（巻7）に、太白山に金星の精が隕ちて白石と化し、玄元像はこれを用いた、という話が見える。後に生じた解釈ではあろうが、太白山の白石を採ることには、そもそもこうした道家的想像力の作用が根底にあるだろう。一方、田同秀の言により函谷故関の尹喜台より発見された「霊符」は、大明宮の正殿である含元殿に献納された。興慶宮大同殿には宗聖観付近より出土した「真容」、玄元皇帝廟には太白山白石の「玉像」、そこに割りこむように、霊宝県の方は一定の地歩を獲得したことになる。

玄元皇帝廟での親祀にさきだち、玄宗は二月十一日、その含元殿で老子に「開元天宝聖文神武皇帝」の尊号を贈っていた。追号授与は翌二年正月十六日に「大聖祖」を加えるなど、さらに荘重さを増すが、その後天宝十三

載二月七日には「大聖祖高上大道金闕玄元天皇大帝」を加える。これは「天皇大帝」の部分を高宗の諡号とおなじくすることにより、神の列位に玄宗自身を組みいれる、その布石を打ったことを意味する（福永光司「昊天上帝と天皇大帝と元始天尊」『道教思想史研究』146頁）。その意識は、玄元皇帝廟の老子像に隣して自身の像を立てるのとおなじところに出るだろう。それは、神の威光にかりてみずからを権威化し士庶に示そうというような俗なことではなく、自身を生きながらにして神の領域にまで引き上げしめたいというような、神であり先祖でもある老子を仰ぎ見ることによって生じた純真な希求であったか。

このほかにも像設は、天宝三載三月に両京と諸郡の開元観と開元寺に金銅の玄宗等身、元始天尊、仏の各一軀を鋳した（「鋳帝等身天尊及仏各一」『冊府元亀』巻54、『旧唐書』礼儀志四誤作「玄元等身」）。元始天尊は道教の最高神。神格化された老子、太上老君を分身とする（福永光司「昊天上帝と天皇大帝と元始天尊」『道教思想史研究』123―155頁）。興慶宮大同殿には小像、玄元皇帝廟には大像、ここに加わった像は、比率はわからないが玄宗の等身像より大きく作られたものであっただろう。老子の「みすがた」は、こうして画像となり玉像となり、また金銅の像となって、両京と天下の老子廟、開元観等におびただしく増殖した。玄宗のすがたもそれにともなった。これらに関連して、太清宮には像設の東に白石を刻して李林甫と陳希烈の形をつくった、との記事が目にとまる（『旧唐書』礼儀志四、『唐会要』）。徐松の注釈（『唐両京城坊考』西京外郭城大寧坊「西南隅太清宮」）によれば、天宝五載のこと。玄宗朝の宗教政策、とりわけ老子像の流布をめぐるメディア戦略の企画立案者と技術指南役がだいたいどのあたりであったか、よく物語る。牛仙客は天宝元年七月に亡くなっていた。

空中聞語　霊応はこれには終わらない。玄宗自身に玄元皇帝の霊応があらわれるのは、夢におとなわれて以来、しばらく時間を経てのこと。それは、覚醒時にあらわれる、一段進んだ体験として語られる。天宝四載正月六日、帝は内道場（大同殿）で兆庶の福を祈願し、親しく黄素の文を撰して登壇したところ、文は空へ舞いあがり、飛んで天へと上った。そのとき空中に「聖寿延長」の声があったという（「帝於内道場為兆庶祈福、親撰黄素文登壇、其文騰空自飛上天、空中有言曰、聖寿延長」『冊府元亀』巻54）。ことは皇太子（肅宗）と中書門下の慶賀の上表にそれぞれ見える。

九日に奉られた皇太子「賀内道場霊異表」（『全唐文』巻45、『冊府元亀』巻54）は、霊応の起こった経緯を、祈願とともに秘薬を祭壇に奉じた、そのおりのこととして述べる。

> 今月六日、伏見、陛下昭告上帝、陰騭下民、勤恤蒼生、克成黄素。況霊丹神合、秘薬天成、聿修増壇、奉以行事。肅恭展礼、飛章騰踊而入雲。虚空有言、聖寿霊長而象岳。休祐霊感、曠古未聞。伏望宣示朝廷、録付史館。
>
> 今月六日、謹んで思うに、陛下は天帝に明らかに告げひそかに下民を定め、ひとびとにねんごろに情けをかけ黄素の文を制作された。まして霊丹の秘薬は神が調合し天の加護により完成し、祖先の徳をのべ壇上にそなえ献上して儀式を挙行したおりのことである。厳粛に儀礼をおこなうと、文章は飛び躍り上がって雲に入った。空中にことばがあり、聖人のよわいは永遠なること高大な山のようであると。よいさいわいの不思議な感応ははるか古より聞いたことがない。謹んで願うらくは朝廷に宣示し記録して修史館に付託せんことを。

次いで十三日に奉られた中書門下「賀玄元皇帝霊応表」（『全唐文』巻962、『冊府元亀』巻54）には、前日玄宗が語ったことばを載せ、前後の情況、及び秘薬のことについてやや詳しい。

……朕以正月甲子日為万姓祈福。初登壇時、疾風甚勁。及行事之際、則恬然清謐。又朕親撰黄素文、置壇所案上、竭誠陳請、須臾騰空、飛上空中。復聞有言、報朕休徴、論蒼生福慶。及行礼事畢、又風起如初。……

前後の情況について、万姓に福を祈るべく、登壇したとき強い風が吹いた。行事の間は一転して静かに、しかし親撰の黄素の文を壇の案上に置き心をこめて読みあげたとき、それは急に舞いあがり空中に飛んだ。ことばが聞こえ、「朕の休徴」と「蒼生の福慶」を告げていた。行事が終わると風がまた吹いた、と言う。つまり、黄素の文が舞いあがったのは、風のせいではない。しかもそれは空中に消えた。そのとき聞こえたことばは、おのが「休徴」と民の「福慶」であるというが、皇太子の上表には「聖寿霊長」とあり、何と言われたのかはっきりしない。解釈をまじえて言うならば、玄宗が登壇し至誠に祈りを捧げる精神集中のなかで一瞬、外界の感覚を遮断する状態がおとずれた。境地に入った。周囲の風も感じず音も聞こえず、そのなかで天声を聞いた。というようなところであろうか。皇太子と中書門下の表現が異なるのは、前者が趣旨を要約するのに対し、後者は帝の発言をより忠実に再現するであろうことにもよる。それぞれの上表に答えた帝の手詔には「神言報休徴之慶」（「答皇太子等表賀内道場霊異手詔」『全唐文』巻32、『冊府元亀』巻54）、また「遂得休徴之応、出自神言」（「答中書門下賀玄元皇帝霊応詔」『全唐文』巻32、『冊府元亀』巻54）とあり、「休徴」は確かなようである。ということを踏まえたう

えでなお、帝のくちぶりは、聞いたことばが明瞭に分節され音節をともなって発語されたものとの印象を与えない。そのような趣旨のことであった、と玄宗は述べているかにみえる。確かに玄宗には聞こえた。聞こえたような気がした。玄宗の体験は白昼夢というのにちかい。何がそれを引き起こしたのか。

……朕近於嵩山所煉薬成、其時亦置於壇側。及夜、左右方欲收薬、又空中聞語『諸霊官雖已赴大同殿、其薬且未須收、此自監守』。言声甚厲。其左右祇承及道士等、聞者莫不驚悚。以達曙之後、乃收其薬。朕為蒼生祈福、有此殊応、与卿等同慶者。……

玄宗のことばは続けて言う。「わたしはちかごろ嵩山で錬成していた薬ができあがり、この行事の際に壇のそばに置いてあった。夜になって左右の侍臣に取りに行かせたところ、また空中にことばが聞こえ、『諸神官が大同殿にこられたとはいえ、その薬はまだ持ち帰るには及ばない。ここにわたしが見守っている』と。言う声ははなはだ激しかった。侍臣と道士ら、聞いたものたちみな驚き震えた。朝になってから持ち帰った……」。左右の「祇承」とは左相李適之と右相李林甫のことか。むろん彼らは皇帝の霊応にこたえたまでのことで、彼らがおなじ体験をしたとは思えない。聞いたことばがあまりに明瞭だからである。しかしともかく、自身が聞いた、そのように思ったことが、侍臣の体験によって裏づけられたことで、玄宗の心のうちには、そのことが確乎とした体験として、現実のこととして、しっかりと根をおろした。心的事実としてできあがった。この不思議な体験に、薬物が影響した可能性は排除できないだろう。田同秀上奏による玄元皇帝のことば「天下太平、聖寿無疆」とい

い、このたびの空中に聞いたことば「聖寿霊長」といい、自身の「寿」の問題が、この頃の玄宗にとって最大の関心事であった。ここでの「寿」とは老いさらばえて枯れ木のようになってなお生きるようなことでない。若わかしく瑞みずしい身体を保ったまま永遠に生きながらえることであり、それは生命の本質そのものの謂でもある。薬物の摂取は昨日今日のことではなかったと思われる。後日、玄宗自身が「吾れ比年　薬物を服せり。金竈を為るに比び、石英を煮煉す。寇戎を経てより、其の器用を失う」（「賜皇帝進焼丹竈詔」『全唐文』巻38）と述べている。嵩山の秘薬の中身は「霊丹」「所煉」等とあるからには、所謂「金丹」の類であろう。丹砂は火で焼けばますます永遠性をたもち変化は妙に、黄金は火に入れ精錬を繰り返しても消滅せず埋めても不朽、物質として不変の性質が永遠の生命の象徴であるという、最上級の薬である（「夫金丹之為物、焼之愈久、変化愈妙。黄金入火、百錬不消、埋之、畢天不朽。服此二物、錬人身体、故能令人不老不死」『抱朴子』金丹篇）。これには九の等級があり「九丹」ともなれば服用するや白日昇天する。作成場所は名山に限られ、嵩山も含まれる。製作者は蹤跡を絶ち、斎戒百日、生臭物を摂ってはいけない。加えて神の加護が必須であり、祭をして「太乙元君・老君・玄女」が鑑省するのを待たねばならない（『抱朴子』金丹篇）。大同殿で左右の侍臣が聞いたというのはこの神の声である。薬効は強力、副作用も当然強い。薬物の効能は、より一般的な「五石散」の場合、延命長寿、若わかしさを保つこと、などと言われる。すなわち人間の生命体としての性能を最大限にまでたかめることに、この種の薬物の要点がある。武恵妃亡失後に見いだされた楊氏が、女道士「太真」となったあと、「貴妃」として後宮に迎えられるのはこの年、天宝四載八月のこと。還暦を迎えた玄宗が、永遠の生命を求め、楊貴妃につりあう身体を得るためにも、薬効の助をかりようと考えるのはむしろ自然なことであっただろう。

さて、この慶賀の表は内外に宣示され、帝の霊応は公的な事実となった。帝は手詔で答え、確信はいよいよ深まる。「答中書門下賀玄元皇帝霊応手詔」に言う。

……豈聖祖揆予之無私、霊真貺我之誠感、遂得休徴之応、出自神言、勤請之詞、上飛空境。永惟虚薄、何以当茲。然福逮蒼生、深為慰也。……

……聖祖であり神である老君はわが私心なきことをはかり誠の感応をたもうたのであろう、かくて休徴の応を得たのは神言に出で、ねんごろな誓願のことばは飛んで空境へとのぼる。わがことをながく思ってくださったのでなければどうしてこのようなことがありえたであろう。しかれば福は蒼生におよびふかく慰めをなすものである。……

二月六日、崇玄館学士門下侍郎の陳希烈が奏上してだめを押した。太清宮の道士、蕭従一なる者が、次のように語ったというのである。「道士蕭従一見玄元皇帝奏」（『全唐文』巻345、『冊府元亀』巻54）に言う。

……今日五更、欲於殿上焚香、行至三清門、忽有一片紫雲従空下、兼有異常音楽。忽然如夢、身心驚駭、見空中有異人、兼仙童玉女。謂従者曰「我是玄元皇帝、可報吾孫、汝是上界真人、令侍吾左右。吾冥使天匠就助、成就訖、長衛護汝、受命無疆、災害自除、天下安楽」。言訖、随雲気便入殿門。……

本日明け方、五更のとき、お勤めに行く途中、場所は三清門（太清宮西門）のあたり、空中に「異人」を見た。

「仙童・玉女」を連れていた。言うことには「わたしは玄元皇帝である。わが子孫に伝えよ。あなたは上界の真人であり、わが左右に侍従せよ。わたしはひそかに天の匠に助けをなすよう言いつけており、できあがったなら、とこしえにあなたを衛護して、天の命を受くることかぎりなし、災害はおのずから除かれ、天下は安楽ならん」と。雲気とともに廟殿へと入っていかれた。云云。

発言を引用する仕方は、ちょうど牛仙客が玄宗の老子夢見を記述するのとおなじである。玄宗の夢がきわめてリアルで生き生きとしていたのと似て、こちらも描写は具体性に富む。異なっているのは、「忽然如夢」突然、夢見たようになって、心身驚駭したところ。夢のようで、夢ではない。覚醒した状態で、神のすがたが見られ、声が聞かれている。そう語られることだ。玄宗の聞いた声がおぼろげであったのにくらべ、左右の侍臣が聞いた声のさらに上を行く明瞭さで、玄宗へのメッセージが告げられる。その内容は、玄宗が神仙世界の真人であり、わが左右に侍せしめるべくすでに万全の準備がととのっている、そのためにひそかに天の匠を派遣して霊薬が完成するように手配している、ということを言うのだろう。つまり、天の声をめぐる一連の事柄にみちすじを与え、ひとつの物語とする役割がこの報告によって果たされている。

目に付くのは、忽然と一片の紫雲が空中よりおりてきた、常ならぬ音楽がともなわれた、雲気に随って殿門に入っていったなど、「紫雲」や「音楽」による視覚効果、音響効果をともなっていることだ。この種の霊応を記した小説の類に典型的に見られる特徴である。たとえば玄宗が夢見した老子像を探しあてるのに、吉川氏が「そこには紫雲が垂れこめ、白光が天につらなっていたという」と述べていたのは、杜光庭「歴代崇道記」（『全唐文』巻933）に「忽於楼観山谷間見有紫雲現、白光属天」と言うのに依ろう。牛仙客の奏文にはないものを杜光庭

が加えたのである。それとおなじようなことがここでなされている。蕭従一によって、あるいは陳希烈によって。

……謹案諸道士学生皆称、今日凌晨、於三清門外、見道士蕭従一鞠恭唱喏三四声、有紫雲及音楽、移時不散。伏惟陛下虔誠奉道、福祐所帰、置玉石真容、侍聖祖左右。仙楽下慶、天将助成、紫雲徘徊、移時不散。空中有語、所報非常、言聖寿之延長、億万載之無極。伏望宣付史官。

発言の引用に続く陳希烈本人の意見を陳述する段にいたっては、例によって、第三者を介在させる仕方で述べる。太清観諸道士、崇玄学生たちがみな口ぐちに称している。本日早朝、三清門外で蕭従一が身を折り曲げ三、四回「うけたまわりました」と言っていた。紫雲と音楽はしばらく消えなかったと。伝聞に伝聞を重ね、発言が幾重にも括弧にくくられる。信憑性を増そうとして、却って疑いが深まる。陳希烈の主旨はその後に来る。「伏して惟みるに、……陛下は玉石の真容を置き、聖祖の左右に侍せられた。仙薬はめでたく賜り、天助によって完成した。……空中にことばが有り、常ならぬことが報じられた。言うことには、聖寿の延長すること、億万歳の極まりなきことを……」。蕭従一の発言において、仙界で起こっていること、すなわち真人としての玄宗が神である老子の傍に侍すべく準備されている、と述べられていたことと、こちら側の世界で玄宗が玄元廟老子玉像の傍らに自身の像を立てたこととが、照応するようなかたちで述べられている。仙薬は老君の思し召しで無窮の寿を与えんがために手をくだしたものである。君が世は永遠でありますように。物語の完成へとむけて、周到な計画のもとに語られている。

帝は手詔をもって答えられた。「答陳希烈奏道士蕭従一見玄元皇帝手詔」（『全唐文』巻32、『冊府元亀』巻54）に言う。

……恭惟聖祖、屢降真容、仙衛接於雲間、飆駕回於天路。又賜以無疆之寿、且欣以助成之言、厳奉神休、良深祗慶。……

……うやうやしきかな聖祖老君はしばしば真容を降したまい、神仙のまもりたちを雲の間に迎えつむじ風の乗物は天の路をめぐる。またかぎりない寿を賜い霊薬完成の援助の言をよろこび、おごそかに神のめでたさを奉じまことに深くつつしみよろこぶ。……

仙人の一団が雲間から風に乗って天の路をはるばると下ってくる。奏上の言にはっきりと述べられていなかったことが映像をともなって語られる。陳希烈が李林甫とともに次年、太清宮に像を立てることを許されるのは、このたびの功によるのであろう。霊応はこの年、進士科の試題にも呈せられた。及第した殷寅・李岑・趙鐸の「玄元皇帝応見賀聖祚無疆」詩が伝えられる（『全唐詩』巻257・258・781、『文苑英華』巻180、『登科記考』巻9）。たとえば趙鐸の作は以下のとおり。

聖主今司契　神功格上玄　　聖主　今　契を司り　神功　上玄に格（いた）る
豈唯求傅野　更有叶鈞天　　豈唯だ傅野を求むるのみならんや　更に鈞天に叶う有り

審夢西山下　焚香北闕前　夢を審かにす　西山の下　香を焚く　北闕の前
道光尊聖日　福応集霊年　道光　聖日に尊し　福応　霊年に集う
咫尺真容近　巍峩大象懸　咫尺　真容近く　巍峩　大象懸かる
觴従百寮献　形為万方伝　觴は百寮より献ぜられ　形は万方の為に伝えらる
声教惟皇矣　英威固邈然　声教　惟れ皇(おお)いなるかな　英威　固より邈然たり
慚無美周頌　徒上祝堯篇　周を美(ほ)むるの頌無きを慚ず　徒に堯を祝するの篇を上る

聖なる主上はいま手形をにぎられ、すぐれた功績は天にまでとどいた。
ただ傅説を野に捜求しただけだろうか、さらに鈞天宮に遊ぶ趣旨にもかなった。
夢の霊験を西の山のふもとに確かめ、香を北の宮殿のまえにたきしめた。
道のかがやきは聖主の治められる日びに尊く、福なる応験はすぐれた年に寄り集まる。
わずかの距離におすがたはちかく、高く厳めしくおおきな像はかかっている。
さかずきは大勢の臣下から献ぜられ、すがたかたちはよろずの国へと伝えられる。
名声と教化はなんとおおいなるものか、すぐれた威厳はもとよりはるかなものだ。
周朝を褒める頌歌がないのがはずかしい、ただ堯帝を言祝ぐ詩篇をたてまつるだけ。

功績が天に伝わり玄宗皇帝は天上界の真人となる約束手形を得られた。天帝は夢に見た賢臣を探したのだが玄

宗皇帝にとっても天宮に遊ぶ願いが叶った。殷の高宗が傅説を求めた故事は『尚書』商書説命上篇に、周の穆王が清都・紫微・鈞天・広楽諸宮に遊ぶ話は『列子』周穆王篇にそれぞれ見える。これらを典故として踏まえつつ、玄宗が夢に見た老子の像を楼観山間に得たこと、大同殿で焚香祈禱中に天声を聞いたこと、いまここに道があらわれ霊応が集中することを綴ってゆく。後半は玄元廟太清宮の玉像のありさま、百僚の祝賀と聖容の流布、帝の教化のすばらしさ等を述べ、いまはまだ臣下として言祝ぐ身分でない自身の立場を述べて締めくくる。帝本人を除いては霊応の実感に欠けるところを、文献上の類似例を典拠とすることで補いつつ、これら拝賀の辞は夥しく生ずることとなる。

朝天赴玉京　天宝元年七月、「高道（不仕）」科挙人徴集の詔は、ほどなく李白のもとにもとどいた。薦主は玉真公主、友人の元丹丘とともに推挙された（魏顥「李翰林集序」「白久居峨眉。与丹丘因持盈法師達。白亦因之入翰林」集巻1）。秋たけなわに南陵を発し、入京（「南陵別児童入京」詩「白酒新熟山中帰、黄鶏啄黍秋正肥」集巻13、「別内赴徴」詩「王命三徴去未還、明朝離別出呉関」集巻24）。親試に臨むことになる。

場所は驪山温泉宮。帝が十月二十六日から十一月二十八日の間行幸したのに高道挙人も扈従した。「従駕温泉宮酔後贈楊山人」詩（集巻8、題従「敦煌唐写本詩選残巻」）に「一朝君王　払拭を垂れ、心を剖き丹を輸（いた）して胸臆を雪ぐ。忽として白日の景光を廻らすを蒙り、直ちに青雲に上りて羽翼を生ず」。「温泉侍従帰逢故人」詩（集巻8）に「漢帝　長楊苑、胡に誇り羽猟して帰る。子雲　侍従を叨くし、賦を献じて光輝有り」等とは、応試の

ことを言うだろう。なお前者の詩が贈られた楊山人とは、瞿蛻園・朱金城『李白集校注』によれば、離京後に開封で高適とともに見送ることになる、そのひと（「送楊山人帰嵩山」詩、集巻15、高適「送楊山人帰嵩陽」詩『全唐詩』巻213）。李陽冰「草堂集序」（集巻1）に「天宝中、皇祖　詔を下し、徵して金馬に就かしむ」とは下詔と応召、「七宝牀を以て食を賜い、御手もて羹を調し以て之に飯わす」とは親試の際、賜食の場面を言ったものだろう。制科の親試には賜食がともなう。帝の言に「卿は是れ布衣にして、名は朕の知と為る。素より道義を畜わうるに非ざれば、何を以て此に及ばん」と、「道の義」に言い及ぶのは、これが「高道（不仕）」科であり、『道徳経』に言う「道」の体現者を選抜する挙であるとの予想を裏づける。帝が「輦を降りて歩して迎え、綺皓を見る如し」や、「為宋中丞自薦表」（集巻26）に「五府交ごも辟すも、聞達を求めず、亦た子真谷口に由りて、名は京師を動かす」とあるのも、これが隠逸挙人であることを窺わせる。この行幸には王維も同行した（王維「和僕射晋公扈従温湯（時為右補闕）」詩『王摩詰文集』巻4『王維集校注』216頁）。

明けて天宝二年正月、含元殿で挙行された元会儀礼で高道挙人の処分の勅が宣示された。孫逖「処分高蹈不仕挙人勅」がそれにあたる。この元会儀礼のさまは「鳳凰　初めて下す紫泥の詔、帝に謁し觴を称げて御筵に登る。愉揚す　九重万乗の主、謔浪す　赤墀青瑣の賢」（「玉壺吟」集巻6）、「清切　紫霄迥かなり、優遊　丹禁通ず。君王　顔色を賜い、声価　煙虹を凌ぐ」（「東武吟」集巻5）、「天門九重　聖人に謁し、龍顔一解　四海春なり。彤庭の左右　万歳を呼び、拝賀す　明主の沈淪を収むるを」（「贈従弟南平太守之遙」詩、集巻10）などのほか、王維「送高道弟耽帰臨淮作（座上成）」にも「君王　蒼龍の闕、九門　十二逢。群公朝謁罷わり、冠剣　丹墀に下る」と述べられる。李白は沙汰があり翰林院へと入った。孫逖起草の勅文に名が挙がらず、もとより甲科登第で

はない。しかしそれに準ずる、よい処遇ではあっただろう。これより次年天宝三載春まで一年余、李白は長安で宮廷の勤めにはげむことになる。

李白の歌行創作は、「梁園吟」「襄陽歌」などそれまでの都市を主題とした作から、在京時の「西岳雲臺歌送丹丘子」「白雲歌送劉十六帰山」、離京後の「鳴皐歌送岑徵君」「鳴皐歌奉餞従翁清帰五崖山居」、及び「夢遊天姥吟留別」など山岳、ないしはそれにちなむものを主題に、山居へと帰ってゆく友人を送る作へと中心が移ってゆく。首都長安において、さまざまの理由でそこを訪れ、また去ってゆくひとを送別する宴の場が形成されており、それに多く遭遇したことが、彼がこのジャンルを特徴的なものとしてかたちづくる要因のひとつである。加えて自身がそもそも隠逸挙人に応じた、もとは見送られる対象である隠逸者の類に属しながら、いまは意を得た身分であるという、絶妙の立場が制作に決定的に作用している。送られてゆく相手に共感し心情を汲みながら創作は行われる。一方で自身との距離がそれぞれの作に映し出される。こうした山岳を主題とする送別歌行は、どのようにして形成されたのか。どのように変化を遂げてゆくのか。在京時と離京後の李白自身の身の上をそれぞれ反映しながら。あるいは玄宗皇帝の霊異の体験から生じた時代の雰囲気を感じながら。「高道（不仕）」挙は玄元皇帝降見の報告が起こったその年に行われた。第二の霊異が起きた天宝四載は、直前の前年末からその年五月にかけてちょうど「高蹈不仕」科の実施が重なる。李白は梁宋の地でこの挙に応じたひとに送別歌行を贈っている。以下、「西岳雲臺歌送丹丘子」を中心に、他の詩や歌行をまじえながら、まずは形成過程を見てゆく。

天宝元年の挙に推薦される僥倖にあずかった李白ではあったが、相応の用意はあった。二十代のなかば、蜀より出てきた彼はしばらく住み着いた安陸で、人材捜求を趣旨とする移文に対し、自薦の文章を書いて「山人李

白」「逸人李白」と称している（「代寿山答孟少府移文書」集巻26）。また州の裴長史へ上った文章では、むかし逸人東厳子と蜀の岷山に隠れ広漢の太守が有道科に挙げようとしたが断ったと（「上安州裴長史書」集巻26）。隠逸者としての自己をアピールしている。これより天宝元年の挙にいたるまでほぼ十年、隠逸者としての足跡は、元丹丘との交往詩十二首に加えて、元演、胡紫陽らとの「冬夜於随州紫陽先生餐霞楼送烟子元演隠仙城山序」「憶旧游寄譙郡元参軍」詩、岑勛らとの「酬岑勛見尋就元丹丘対酒待以詩見招」詩など、道家者流との交遊によりたどることができる。郁賢皓「李白与元丹丘交遊考」（『李白叢考』97―113頁）は、李白と元丹丘との交遊について考察して言う。出会いは李白二十歳の頃、蜀において。李白は蜀を出て安陸に、丹丘は鄂渚と江漢の間に流寓、交遊が密であった。その後の概要は以下のとおり。

開元二十年以降、丹丘は嵩山に隠居。

同二十二年頃、李白は嵩山を訪れともに隠居。

このあと元演、元丹丘と三人で随州に胡紫陽を訪ねる。（詹＝開元27）

同二十三・二十四年、李白は元演に従い太原に行く。

太原から帰った李白と峨眉山から帰った元丹丘が洛陽で会う。

岑勛と元丹丘の招きで李白はふたたび嵩山に遊ぶ。

李白は東魯に行く。天宝元年五月まで滞在。

天宝元年秋、元丹丘は嵩山で胡紫陽より道籙を授かる。（詹＝天宝2）

李白は南陵で詔を受け都へ旅立つ。丹丘も同じ頃都へ。李白は供奉翰林。
丹丘は西京大昭成観□□□威儀。丹丘の在職は天宝二年まで確認される。
同年、胡紫陽も入京（東京）。同年遷去、十月二十三日葬。（詹＝天宝2）

補足説明すれば、開元二十二年、李白が嵩山に隠居したのは、玄宗皇帝が東都洛陽に滞在していたからである。開元二十二年正月六日に駕は西京を発し二十六日に到着、開元二十四年十月二日東都を発し二十一日西京へ帰着した。このとき東都のお膝元、嵩山には隠者が集結していた。たとえばこの少し前、開元二十年十月には隠逸挙人とおぼしきものがあった。「命巡幸所至、有賢才未聞達者、挙之」（『登科記考』巻7）。十二月十四日には御注『道徳経』成り「衆に詢わん」旨の勅が出されており、これに関連した処置かと思われる。こうした機会を期待してのことであろう。王維の友人である張諲などもそうした隠者のひとりである。

李白が元丹丘と元演とともに随州に胡紫陽を訪ねたことは「冬夜於随州紫陽先生餐霞楼送烟子元演隠仙城山序」及び「憶旧游寄譙郡元参軍」詩に詳述されるが、詹鍈『李白詩文繫年』は開元二十七年のこととしていた。郁氏の想定はそれを嵩山隠居後の時期に遡らせている。また詹氏は元丹丘が胡紫陽から道籙を授かったことと胡紫陽の入京を天宝二年としている。原資料となる李白「漢東紫陽先生碑銘」（王琦注本巻30詩文拾遺）は劉大彬『茅山志』から採録されたものだが、「天宝初、威儀元丹丘、道門龍鳳、厚礼致屈、伝籙於嵩山。東京大唐□□宮三請固辞。……至其年十月二十三日、葬於郭東之新松山、春秋六十有二」とあるうち、原碑に残欠した「□□宮」を「太微宮」とみて、東都玄元廟が改称された天宝二年としたものである。ただし詹氏が元丹丘授籙の場所

を「伝籙於嵩山東京大唐□□宮」と、「嵩山」から「東京大唐……」以下に続けたのは誤読であり、「東京大唐□□宮三請固辞」は宮廷への召喚を三度受けたが固辞したことを意味しよう。伝籙の場所としては玄元廟「太微宮」がふさわしいが、召喚の場所であれば異なってくる。「天宝初」が必ずしも天宝元年を意味しない、というのは一考の余地をのこすが、二年とする根拠もない。天宝元年と考えるのがよいだろう。

李白の送別歌行のうち比較的早い時期に作られたとみられるものが、一道流を見送った「鳳笙篇」（集巻5）として見えている。もともと方外の士を題材とする歌行が、宋之問「冬宵引贈司馬承禎」によって開拓されており、張楚金「逸人歌贈李山人」李白「元丹丘歌」などに受け継がれる。武后期の歌行には、これに加えて、ある物や事柄を主題とする、所謂「詠物」歌行の伝統があった。宋之問の例で、隠士司馬承禎を厳寒の山中に配する、というように人物像を描くのに、焦点を「冬の宵」にずらしつつおこなうのも、その応用である。これを送別の場でおこなう、という第三の要素は、李白「赤壁歌送別」王維「双黄鵠歌送別」など、開元年間末頃からめだってあらわれるようになる。この李白の作は、山岳の地で、ある道家者が訪道求仙のために別れを告げる場で詠まれた。その際、旅立つひとのさまを、そのひとが得意な笙の演奏にかけて描く、という仕方を採る。

仙人十五愛吹笙　　仙人十五　笙を吹くを愛(この)む
学得崑丘彩鳳鳴　　学び得たり　崑丘彩鳳の鳴
始聞煉気餐金液　　始めて聞く　気を煉り金液を餐するを
復道朝天赴玉京　　復た道う　天に朝し玉京に赴くを

玉京迢迢幾千里　玉京迢迢　幾千里
鳳笙去去無窮已　鳳笙去去　窮まり已む無し
欲嘆離声発絳脣　嘆ぜんと欲す　離声の絳脣に発するを
更嗟別調流纎指　更に嗟く　別調の纎指に流るるを
此時惜別詎堪聞　此の時　別れを惜しむ　詎ぞ聞くに堪えん
此地相看未忍分　此の地　相い看て　未だ分かるるに忍びず
重吟真曲和清吹　重ねて真曲を吟じて　清吹に和し
卻奏仙歌響緑雲　卻って仙歌を奏して　緑雲に響く
緑雲紫気向函関　緑雲紫気　函関に向う
訪道応尋緱氏山　道を訪わば応に緱氏山を尋ぬべし
莫学吹笙王子晋　学ぶ莫れ　吹笙の王子晋
一遇浮丘断不還　一たび浮丘に遇いて　断じて還らず

仙人は十五にして吹笙をこのみ、崑崙山の色鮮やかな鳳の鳴き方を習得した。
かねて心気を錬り黄金の液を飲んでいたが、こんど天帝に招かれて玉京に赴くという。
玉京ははるか幾千里のかなた、鳳の笙の音は遠ざかってもやむことがない。
別れの歌が紅い唇から漏れるとため息が出、別れの調べが細い指に流れると嘆きたくなる。

このとき別れを惜しんで聞くのがつらい、この地で顔を見合わせ分かれるに忍びない。
真人の曲をうたい清らかな笙に唱和すれば、仙人の歌を演奏して緑の雲間へと響く。
緑の雲と紫の気は函谷関へとむかい、道をもとめるなら緱氏山をたずねるのがよい。
笙を吹く王子晋をまねしてはいけない、いちど浮丘公に遇ったきり還らなかったから。

情景は、そのひとが笙を学び仙道を追究してさらなる高みへとのぼろうとする、来し方行く末の叙述から、送られる君と送り出すわれわれそれぞれの別れの曲へと移り、見送るひとの耐え難い気持と重ねて演奏される曲へさらに遷移して、そのひとへメッセージが投げられる。めでたい兆しにつつまれて緱氏山へ行くのがよい。しかし王子晋のように行ったきり還らないなどということにはならぬよう。

このひとが誰かということについて、『李白全集校注彙釈集評』備考には「憶旧游寄譙郡元参軍」詩に「紫陽之真人、邀我吹玉笙。餐霞楼上動仙楽、嘈然宛似鸞鳳鳴」とあることなどを理由に、胡紫陽ではないかとしている。李白の歌行がおおむね特別な関係にあるひとに贈られていることを考えると、この作の対象が胡紫陽であることは考えられてよい。そうであれば、作詩年代はその交遊が確認される開元二十二年もしくは開元二十七年から、天宝初にかけてのことになる。王琦は「朝天赴玉京」が応詔入京を言うとしたが、『李白全集校注彙釈集評』は李詩における「玉京」が仙界仙山を指し京城を意味しないことなどを理由にこれを否定、訪道求仙の作とした。いまそれに従う。なお「絳脣」「纖指」の歌唱と奏楽は、送り出す側の楽人を言うのであろう。

このほか「送韓準裴政孔巣父還山」詩（集巻14）は、隠士を送る詩の原型ともいうべき作である。そもそも隠

逸挙人は、制科挙行の下詔をうけて「所在長官」や「検察使・採訪使」らが推薦をおこなう。そうして挙に臨んだひとが帰隠する際に、都やその周辺で贈られるのが「還山」の詩である。ここでは隠逸挙人に推挙してもらうことを求めて、隠者が地方州郡の長官に謁見するという、最初の段階が描かれる。

猟客張兎罝　不能挂龍虎　　猟客　兎罝を張るも　龍虎を挂くる能わず
所以青雲人　高歌在巌戸　　所以に青雲の人　高歌し巌戸に在り
韓生信英彦　裴子含清真　　韓生　信に英彦　裴子　清真を含む
孔侯復秀出　倶与雲霞親　　孔侯　復た秀出　倶に雲霞と親し
峻節凌遠松　同衾臥盤石　　峻節　遠松を凌ぎ　衾を同じくして盤石に臥す
斧冰嗽寒泉　三子同二屐　　冰を斧して寒泉に嗽ぎ　三子　二屐を同じくす
時時或乗興　往往雲無心　　時時　或は興に乗じ　往往　雲は無心
出山揖牧伯　長嘯軽衣簪　　山を出でて牧伯に揖し　長嘯して衣簪を軽んず
昨宵夢裏還　云弄竹渓月　　昨宵　夢裏に還り　云(ここ)に竹渓の月を弄ぶ
今晨魯東門　帳飲与君別　　今晨　魯東門　帳飲して君と別る
雪崖滑去馬　蘿径迷帰人　　雪崖　去馬滑り　蘿径　帰人迷う
相思若煙草　歴乱無冬春　　相思　煙草の若し　歴乱　冬春無し

猟師が兎の網を張っても龍や虎を捕ることはできない、だから高尚の士はたからかに岩屋に歌うのだ。
韓さんはまことに才気にみち裴さんは純真さをふくみ、孔さんも秀才でともに雲や霞に親しんでいる。
高節は遠くの松をもしのぎ同じ布団で岩に寝る、氷を割って冷たい流れに口を洗い三人で二屐を共用する。
興に乗ることもあるが往往にして雲のように無心、山を出て長官にお辞儀をし長く嘯いて官職を軽視する。
昨夜夢に山に還り竹渓の月をめでたというが、今朝は魯の東門で酒宴を張りあなたがたとお別れをする。
雪の崖に行く馬は滑り蔦の路に帰る人は迷う、思う気持は煙る草のように千千に乱れて冬も春もない。

大人は人材捜求のあみにかからずつねに野に在るが、韓生ら三人もそのたぐいである。ふだんなかよく山に生活しているが、ふと山を下りて州の長官に謁見することとなった。しかし山を夢に見て帰りたくなりいま別れの席に臨む。いつまでも君のことを思っている。山野に高臥する隠士が招請を受けて拝謁、また山に還ってゆく一部始終が、高士の伝記に見える物語そのままに再現される。

作詩時期は、送別の場所が「魯東門」とあり、李白が東魯に移居して以降のこと。詹氏は開元二十四年とし、郁氏は東魯移居を同二十七年に遅らせる。安旗・薛天緯『李白全集編年注釈』は同二十八年。筧文夫「李白と「竹渓の六逸」」（『唐宋文学論考』225―239頁）は孔巣父の年齢を推定して安氏説に左袒する。隠逸挙人は、開元二十七年正月「諸州刺史挙徳行尤異、不求聞達者、特乗伝赴京」、同年二月「草沢間有殊才異行、文堪経国、為衆所推、如不求聞達者、所由長官、以礼徴送」があった。これらにかかわってのことである可能性はある。

なお韓準・裴政・孔巣父と李白に、張叔明・陶沔を加えて「竹渓六逸」と号したとする逸話が『旧唐書』孔巣

父伝、及び李白伝に見える。『新唐書』李白伝にもそれを襲う。『李白集校注』評箋には、李白ら竹渓諸人の酬唱は多くあったのが散逸した、徂徠山居住は短い時間であり魯郡に寓居したおりのこと、韓準・裴政・孔巣父は真の隠者ではなくこの詩から干謁が不首尾におわり山に還ることが知れる、と言う。関連の詩は他にもあったのかもしれない。しかしこの詩では李白は隠者を送る立場であり、三人とは一線を画している。李白も含めて六逸に数えるのは、後に生じた話題にすぎないであろう。

西岳雲臺歌　李白の送別歌行は、召し出された道士や隠士が皇帝に謁見する場面、送別の場で帰隠する山に思いを馳せる場面などによって構成される。その際、山岳にちなむ品、ないし山岳そのものが詠物の対象として選ばれる。このふたつの要素のうち、前者については初唐の王績がつとに主題化していた。「贈李徵士大寿」詩（韓理洲校点『王無功文集』五巻本会校巻第三107頁）に、李大寿なる人物が宮廷に招かれ、皇帝に謁見して帰隠するさまが描かれる。「九徵　書未だ已まず、十辟　誉弥彰らか。副君　綺季を迎え、天子　厳光を送る」。これを送別の場に置き直し、謁見を終えた隠士が山岳へと向かう、その時間を描きだすのが盛唐の作。後者の要素、詠物の対象として、李白には「白雲」を選んだ作「白雲歌送劉十六帰山」（集巻7）がある。

楚山秦山皆白雲　楚山秦山　皆　白雲
白雲処処長随君　白雲処処　長に君に随う

長随君　　長に君に随う
君入楚山裏　　君は入る　楚山の裏
雲亦随君渡湘水　　雲も亦た君に随いて湘水を渡る
湘水上　女蘿衣　　湘水の上　女蘿の衣
白雲堪臥君早帰　　白雲　臥すに堪う　君早く帰れ

楚のやま秦のやまどちらにも白い雲、白い雲はどこでもずっと君についてゆく。
ずっと君についてゆく。
君が楚のやまのなかに入っていくと、雲もまた君のあとをついて湘水をわたる。
湘水のほとりに女蘿のころも。白い雲は横たわるのによく君もはやく帰るがよい。

陶弘景が斉の高帝に答えた詩で「嶺上に白雲多し。……持ちて君に寄するに堪えず」と、俗界では霧消する価値の象徴として用いられて以来、「白雲」は隠者に近しい素材として扱われてきた。ここではその遍在する属性に着目し、別れの地から帰隠する楚の山までずっと付き添ってくれる、親しい友のような存在として描きだす。隠棲の地は湘水のほとり、ひかげのかずらを身にまとい、白い雲をしとねに寝ころがる。隠者をそっと包みこむ、やわらかな属性をもあわせて引き出しながら。行く先で相手が見るだろう風景へと移ってゆく。「劉十六」が誰か、隠逸挙人に応じたものか、詳細はわからない。作詩時期は、作中に「秦山」とあり、送別の場が長安付近で

あることから、李白在京時。諸家は天宝二年から三載に懸けている。なお『李太白文集』には同作の異なるバージョンが「白雲歌送友人」（集巻15）と題して別に収められている。「楚山秦山多白雲、白雲処処長随君。君今還入楚山裏、雲亦随君渡湘水。水上女蘿衣白雲、早臥早行君早起」。流伝の過程で差異を生じたものと思われる。

山岳を主題とした歌行には宋之問「下山歌」や王維「贈徐中書望終南山歌」などがあった。これらは、そこから下るゆるやかな動きや、遠くから望まれた山容とともに、心情を述べたもの。李白はこれと異なり、山岳そのものを素材として詠物の表現を試みる。それは詩人にとってのチャレンジでもあっただろう。さまざまな工夫が、詩型を異にするいくつかの作に施される。「西岳雲臺歌送丹丘子」（集巻6）は召し出された道士元丹丘の送別にあたり、彼が住まう西岳華山の雲臺峰を神話的時間に遡って描きだす。この友人に対しては嵩山での活動を詠んだ「元丹丘歌」（集巻6）があった。「元丹丘、神仙を愛（この）む。朝に潁川の清流に飲み、暮に嵩岑の紫煙に還る。三十六峰　長に周旋す。長に周旋し、星虹を躡む。身は飛龍に騎り耳は風を生じ、河を横ぎり海を跨いで天と通ず。我は知る爾の遊　心窮り無きを」。ここでは送別の場から重ねてその活躍ぶりを描く。

西岳峥嶸何壮哉　西岳峥嶸として何ぞ壮なる哉
黄河如絲天際来　黄河　絲の如く天際より来る
黄河万里触山動　黄河万里　山に触れて動き
盤渦轂転秦地雷　盤渦轂転　秦地雷る
栄光休気紛五彩　栄光休気　五彩紛たり

千年一清聖人在　千年一たび清みて聖人在り
巨霊咆哮擘両山　巨霊咆哮して　両山を擘き
洪波噴流射東海　洪波噴流して　東海を射る
三峯却立如欲摧　三峯却立して　摧けんと欲する如し
翠崖丹谷高掌開　翠崖丹谷　高掌開く
白帝金精運元気　白帝の金精　元気を運らし
石作蓮花雲作臺　石　蓮花を作し　雲　臺を作す
雲臺閣道連窈冥　雲臺の閣道　窈冥に連なり
中有不死丹丘生　中に不死の丹丘生有り
明星玉女備灑掃　明星玉女　灑掃を備え
麻姑搔背指爪軽　麻姑　背を搔きて　指爪軽し
我皇手把天地戸　我皇　手に天地の戸を把り
丹丘談天与天語　丹丘　天を談じて天と語る
九重出入生光輝　九重出入　光輝を生じ
東求蓬萊復西帰　東のかた蓬萊を求め　復た西に帰る
玉漿儻恵故人飲　玉漿　儻し故人に恵んで飲ましむれば
騎二茅龍上天飛　二茅龍に騎り　天に上りて飛ばん

西岳は高くそびえなんと勢いさかんなこと、黄河は糸のように天の際からやってくる。
黄河は万里彼方から山に接触して揺り動かし、渦巻き回転して秦の地に轟きわたる。
はえある光めでたい気は色鮮やかにまじり、千年にいちど澄みきると聖人が現れる。
河神巨霊はうなり声をあげ山をふたつに劈き、大波が吹きだし流れて東海へと迸る。
三つの峰はそり返っていまにも砕けそう、みどりの崖あかい谷に高い手のひらが開く。
白帝の金の精は根元の気をめぐらせ、岩は蓮の花のよう雲は台のよう。
雲臺の渡り廊下は奥深いところへと通じ、中には不死の丹丘生がいる。
明星玉女がさっぱりと掃き清め、麻姑が背中を掻いてくれる指の爪は軽やか。
わが皇帝はおん手に天地の扉を握られ、丹丘は天のことを語って天子と話する。
宮中九重の門に出入りして輝くばかり、東に蓬莱をたずねまた西に帰ってくる。
玉の液が友のよしみで飲ませてもらえるなら、二つの茅の龍にのり天へ飛びあがろう。

李白の山岳描写は、目前に見る西岳の偉容に始まり、それがどのように形成されたか、視界の彼方、天の際から流れてくる黄河へと、渦を巻く奔流に削られ磨成された生成の時へと展開する。そこでは、山岳それ自体がうちにたくわえる力が、河流の力動とのせめぎあいにより顕わとなる。力の伝播は、神話の時間へと遡り、河神の登場による峰の破壊、その結果として現状にのこされた巨大な掌の跡、蓮の花がひらいたような峰の形状へと及んでゆく。この力動性こそが、山岳を描く際の提要となる、他に類を見ない李白の際だった特徴であろう。この

希有な成り立ちをもつ山の仙人として、友人元丹丘は登場してくる。内部には深奥へと続く路があり、仙女を侍らせてそのなかに居る。今上陛下は天地を主宰される。そのお方とわが丹丘は語りあう。宮廷で活躍また聖地へと奔走。できるなら仙薬のお相伴にあずかって登仙したい。

作詩時期は翰林供奉の任にあった時とみてよい。「我皇手把天地戸」は玄宗の治世を、天地を主宰すると最大級の褒めことばで述べる。黄河が澄んだときに聖人があらわれる「千年一清聖人在」とは、いまがその時であることを暗に含もう。詹氏『繫年』は翰林供奉時の天宝三載とし、安氏は同二年とする。郁氏が「東求蓬萊復西帰」を東蒙の旧居から華山に移居することとして天宝四載に懸け、『彙釈集評』が左袒するのには従いがたい。「我皇」「聖人」などひとつひとつの文言以上に、全体の醸すにおいが同時代の雰囲気によく同期しているように感じられる。皇帝の霊異に投ずる、浮き立った時代の雰囲気に。開元二十九年から天宝元年にかけて、世の現実は、玄宗の夢を追いかけるようにして形成されてゆく。この作に玄宗の体験の直接的な反映があると言うのではない。そうではなくて、友人の道士に対して神仙のように見立てて描く際に、それを受け入れる物語の基盤がこの時代において形成されており、それとこの作は同期しているだろう、ということだ。歌行は時代の真相を映し出す。しかしそこにあらわれた現実はすでに幻想を背後に含んでおり、真の現実とは言えない現実だとすると、そうした生地によって織りなされる作品世界が映し出す「真なるもの」とはどのようなものか。それは玄宗朝の虚構そのものを映し出すことになるのではないか。「西岳雲臺歌送丹丘子」はそのような作であろう。

李頎「送王道士還山」詩（『全唐詩』巻133）は宮廷に招かれた道士を七言古詩によって送別する類似の作である。ただし詠物の要素はなく叙述は人物造型を中心になされる。いま対照して李白「歌行」の特徴を確かめておく。

嵩陽道士餐柏実　嵩陽の道士　柏実を餐し
居処三花対石室　居処は　三花　石室に対す
心窮伏火陽精丹　心は窮む　伏火陽精の丹
口誦淮王万畢術　口は誦す　淮王万畢の術
自言神訣不可求　自ら言う　神訣は求む可からずと
我師聞之玄圃遊　我が師　之を聞かんと玄圃に遊ぶ
出入彤庭佩金印　彤庭に出入して　金印を佩び
承恩赫赫如王侯　恩を承け　赫赫　王侯の如し
双峯樹下曾受業　双峯樹下　曾て業を受（さず）かる
応伝肘後長生法　応に伝うべし　肘後長生法
吾聞仙地多後身　吾は聞く　仙地に後身多しと
安知不是具茨人　安ぞ知らん　是れ具茨の人ならざるを
玉膏清泠瀑泉水　玉膏　清泠たり瀑泉の水
白雲谿中日方此　白雲谿中　日　此に方ぶ
後今不見数十年　今に後るれば　見えざること数十年
鬢髪顔容只如是　鬢髪顔容　只だ是の如からん
先生捨我欲何帰　先生　我を捨てて何にか帰せんと欲す

竹杖黄裳登翠微　竹杖黄裳もて　翠微に登らん
当有巌前白蝙蝠　当に巌前の白蝙蝠有りて
迎君日暮双来飛　君を迎えて日暮　双つながら来飛すべし

嵩山の南に住む道士は柏の実を食べ、住処の側には三花樹が岩の室堂に向かいあう。
丹砂を日に曝し火で焙る錬成方を心に極め、淮南王の鴻宝万畢の仙術を口に唱える。
みずから神の秘訣は求むべくもないと言い、我が師はこれを聞こうと玄圃へ遊ばれた。
禁中の朱塗りの庭に出入りし金印を帯び、皇帝の恩をうけ権勢あるさまは王侯のよう。
二つの峰の木の下でかつてわざを伝授された、肘後長生法は伝えられるべきものだ。
わたしは仙の土地には生まれ変わりが多いと聞く、具茨山の仙人でないと誰が知ろう。
玉のあぶらは滝のしぶきに冷たく清らか、白雲の渓谷のなか太陽がこれと並び輝く。
これからあと数十年あえなかったとしても、髪や顔のさまはただこのようだろう。
先生はわたしを置き去りにどこへ行く。竹の杖と黄色の衣裳でみどりの山に登る。
岩の前には白いこうもりがいて、君を迎えて日の暮れにふたつ飛んでくるだろう。

情景は、王道士の山中におけるたたずまいから宮廷への招聘にすすみ、仙薬によって今後も変わらないであろうそのひとのさまや別後の山の風景へと展開する。「出入彤庭……」の二句は、当人が隠逸挙人によって宮廷に

入ったことを言うかにみえる。中間「双峯樹下……」の二句に、かつて業を授けられたとは、相手と自身の関係に言及したものであろうか。それを折り返しとして「吾聞仙地……」の二句は相手が神仙の身ではないかと言い、全体に物語であるかのような風味を加えている。作詩時期は不明。両詩人の作風に感じられる類似性は、ともに道家の世界観を背景にするところに理由のひとつを求めることができるだろう。李白の作には運動性に富むところが、比較対照することにより個性として見えてくる。

落第還嵩山　その他、李白が翰林供奉時に隠士を送別した五言古詩の作に「送裴十八図南帰嵩山二首」と「送于十八応四子挙落第還嵩山」詩がある。隠士を送る詩の叙情は、晋代「招隠詩」以来の伝統をうけ、隠の境涯がいかにすばらしいか、しかしあこがれながらも官を辞することができない、という隠と仕の間に揺れる思いによって形成される。王維の例など、現職に眷恋することの忸怩たる思いや自己弁護の気分が濃厚なものが多い。李白の場合、仕の立場にあるもの特有の、勿体ぶった感じが踏まえられつつも、それがあまり嫌みに聞こえないのは、隠逸としての立場がより身に染みついたもので、相手への思い遣りが真情にちかいと感じさせるからだろうか。「送裴十八図南帰嵩山二首」（集巻15）は長安の風俗を写した詩としても有名である。

何処可為別　長安青綺門　何処か別れを為すべし　長安　青綺門
胡姫招素手　延客酔金樽　胡姫　素手を招き　客を延いて金樽に酔わしむ

臨当上馬時　我独与君言　馬に上る時に臨当して　我独り君と言う
風吹芳蘭折　日没鳥雀喧　風吹きて芳蘭折れ　日没して鳥雀喧しと
挙手指飛鴻　此情難具論　手を挙げて飛鴻を指す　此の情　具さに論じ難し
同帰無早晩　潁水有清源　同帰　早晩無し　潁水　清源有り

どこでお別れしたらよいか、それは長安の青綺門。
異国の女性がしろい手で手招きし、客引きをして金の酒樽で酔わせてくれる。
馬に乗るというときになって、わたしはただあなたに語りかける。
風が吹くと香りのよい蘭は折れてしまい、日が沈むと鳥や雀たちは騒ぎたてると。
手を挙げて飛ぶおおとりを指さす、この気持は口に出しては言いにくい。
おなじ所へ帰るのはさほど先のことでない、潁水にはきよらかな水源がある。

君思潁水緑　忽復帰嵩岑　君は潁水の緑を思い　忽として復た嵩岑に帰る
帰時莫洗耳　為我洗其心　帰時　耳を洗う莫れ　我が為に其の心を洗え
洗心得真情　洗耳徒買名　心を洗うは真情を得　耳を洗うは徒に名を買う
謝公終一起　相与済蒼生　謝公　終に一起す　相与に蒼生を済わん

あなたは潁水のみどり色を心に思い、ふとまた嵩山の峰に帰ってしまう。
帰ったら耳を洗うようなことはせず、わたしのためにその心を洗ってくれ。
心を洗うとほんとうの気持が得られる、耳を洗えばただ隠者の名を買うだけ。
謝安石がとうとう立ち上がったように、いっしょに民草を救おうではないか。

相手の裴図南がどのような情況で嵩山に帰るのか、何かの試に応じたのか、詳細はわからない。宮廷生活での軋轢が詠みこまれ、奉職後ある程度時間を経ての作であることが思われる。また「送于十八応四子挙落第還嵩山」詩（集巻15）は、開元二十九年に始まった「道挙」に応じたひとへの作であり、その実際が窺える点において注目される。

吾祖吹橐籥　天人信森羅　　吾が祖　橐籥（たくやく）を吹き　天人　信に森羅す
帰根復太素　群動熙元和　　根に帰り太素に復し　群動　元和に熙（やわら）ぐ
炎炎四真人　摛弁若濤波　　炎炎（たんたん）たる四真人　弁を摛（し）きて濤波の若し
交流無時寂　楊墨日成科　　交ごも流れて時の寂たる無く　楊墨　日び科を成す
夫子聞洛誦　誇才才故多　　夫子　洛誦を聞き　才を誇りて　才故（もと）より多し
為金好踴躍　久客方蹉跎　　金と為り好し踴躍せん　久しく客たりて方に蹉跎す
道可束売之　五宝溢山河　　道は束（つか）ねて之を売るべけんや　五宝　山河に溢る

勧君還嵩丘　開酌眄庭柯　　君に勧む　嵩丘に還り　開酌して庭柯を眄(み)るを
三花如未落　乗興一来過　　三花　如し未だ落ちざれば　興に乗りて一たび来過せん

わが祖老子は天地のふいごうを吹き、道を得たひとがずらりと居並んでいる。
根本にかえり世界は始元性を回復して、生きとし生けるものはゆったりとやすらぐ。
すぐれたことばの四人の真人は、弁辞を天下に布き延べること大波のよう。
どれもが流布してさびれるときはなく、文字となりだんだん科目となっていった。
先生の道は連続して暗唱する段階にあり、才知を誇っているが才知はもとより豊か。
自分は金になろうといざ勇んではみたが、ながらく旅ずまいとなりつまずいている。
道は二束三文で売るようなものだろうか、五つの宝たる徳はそこ此処にみちている。
君にお勧めする、嵩山にかえって、酒を酌み庭木の枝ぶりに目を遣ることを。
三花樹の花がまだ散っていなかったなら、興趣のおもむくままにいちどたち寄ろう。

制科「高道」挙によって奉職中の自身に対し、相手は新たに制定された、常科「明経」準拠の「明四子」挙に応じたひとである。落第したとはいえ、わが祖老子以来道家が末広がりとなり科挙の科目となった、この「四子」挙に応じた于某に対し、李白は「夫子」先生と呼称する。彼の道は「副墨」から「洛誦」の段階へ、すなわち文字から暗唱の段階へと深まっていると。『荘子』大宗師篇を踏まえて言う。ここには、四子の暗記を主とす

る試験形態が踏まえられている。惜しくも落第となった。しかし道はくちすぎの手段でない。めぐみは遍在する。帰って酒を酌み庭の木を見よ。かの陶淵明のように。わたしもそのうち訪ねよう。おなじ「道」を志すものとしての立場から相手を思い遣る気持があらわされる。

〈キーワード〉李白、玄宗、老子